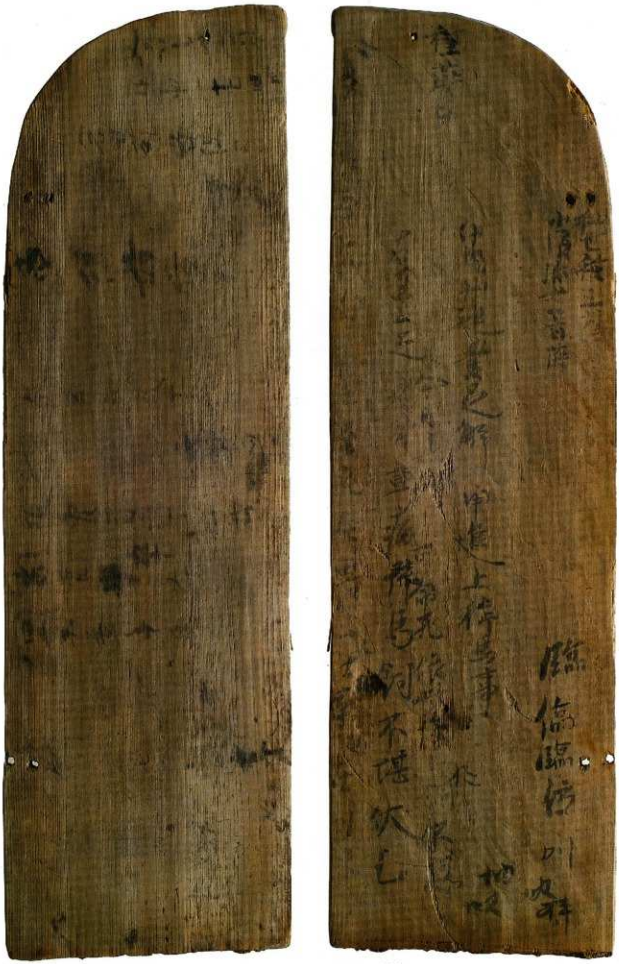
五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う

下田東遺跡発掘調査概報

—平成17年度—

2007. 3

香芝市教育委員会



H地区　SE4095 出土　木簡

1. H地区　SE4095　検出状況

2. H地区　SE4095　西半裁　遺物出土状況（西から）

序　　文

香芝市は、奈良県の北西部、『万葉集』にもうたわれた二上山の麓に位置します。古代から穴虫越えや関屋越えが通じ、大和と河内を結ぶ交通の要衝として栄えました。近年は大阪のベッドタウンとして急速に開発が進み、人口は増加の一途をたどっております。

なお、二上山からは旧石器時代から石器の素材として用いられたサヌカイト、古墳時代以降に石棺や基壇の化粧石として切り出された凝灰岩、そして、明治以降に研磨材などに利用されたざくろ石などが産出し、これらの石はそれぞれの時代において盛んに利用され文化の発展に寄与しました。

また、市内には国史跡に指定されている尼寺廃寺跡や平野塚穴山古墳をはじめ、旧石器時代からの石器生産をおこなっていた二上山北麓遺跡群や奈良盆地で初めて須恵器が生産された平野窯跡群、さらには、５世紀末に築造されたものとしては全国屈指の規模を誇る前方後円墳の狐井城山古墳など、数多くの貴重な遺跡があります。

さて、今回報告する下田東遺跡は、平成13年度より土地区画整理事業にともなって発掘調査を行っており、そのうち平成17年度に実施した調査の概要報告書です。この調査では「種蒔日」として「和世種三月六日」、「小須流女十一日蒔」、さらには「田刈」日として「七月十二日…」と記された木簡も出土し、当時の農作業を考える上で超一級の資料もみつかり全国的に注目されています。

最後に、発掘調査を実施するにあたり、ご協力を賜りました関係者の皆さまに感謝申し上げ、この事業が今後も円滑に進むよう、関係各位のより一層のご指導、ご協力をお願いいたします。

平成19年３月

香芝市教育委員会
教育長　山田勝治

例　言

1．本書は、奈良県香芝市下田東３丁目および弧井に所在する下田東遺跡、瓦口森田遺跡、未命名の遺物散布２ヵ所における第５次発掘調査の概要報告である。なお、今後調査地一帯を「下田東遺跡」に再編する予定で、本書も下田東遺跡として報告する。

2．発掘調査は、平成17年度国土交通省国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名	大和都市計画・五位堂駅前北第二土地区画整理事業
事業者	香芝市
調査体制	香芝市教育委員会事務局　生涯学習課
	主　査　山下隆次
	臨時職員　発掘調査員　福田由里子
	同　藤田智子
	同　湯本　整
	臨時職員　巽　義夫

なお、現地調査は、福田がＨ地区、Ｋ地区、Ｌ地区60トレンチを担当し、藤田がＩ地区、Ｊ地区、Ｌ地区59トレンチを担当した。

3．本書で使用した方位は真北を示す。本書挿図の座標軸は世界測地系による。高さは東京湾の平均海面を基準にしている。

4．写真図版で使用した遺物の番号は、本文中の番号と一致する。

5．調査にあたっては、香芝市都市整備部区画整理課から協力を得た。

6．発掘作業にかかる土木作業は安西工業(株)及び(社)香芝市シルバー人材センター、出土遺物の樹種同定は(株)吉田生物研究所、出土遺物の写真撮影はファーム、遺物実測図のデジタルトレースは文化財サービスにそれぞれ委託した。航空写真測量作業は３回行った。それぞれ、１回目は写測エンジニアリング(株)〔Ｈ地区〕、２回目は(株)アスコ〔Ｊ地区・Ｌ60トレンチ〕、３回目は(株)パスコ〔Ｉ地区・Ｋ地区〕である。

7．発掘調査及び本書の作成にあたり、以下の方々（組織）のご助言、参加、協力を得た。記して感謝します。
（敬称略・順不同）
鶴見泰寿、宮原晋一、和田萃、前田修一、赤松佳奈、泉森　皎、大倉利予、金村茂子、金松　誠、古閑正浩、清水　隆、須崎憲一、竹田静子、田中久美子、田中純一郎、波多野　篤、中川清一、野水宏美、三岡伸吉、山根弓果、米澤陽一、木簡学会、延喜式輪読会

8．本書の執筆及び編集は、二上山博物館 臨時職員辰巳陽一・巽　義夫の協力を得て、藤田が行った。

目　次

1．はじめに…… 1
2．位置と環境…… 1
3．調査の経緯と経過…… 3
4．各調査区の概要…… 6
（1）Ｈ地区の調査 …… 6
（2）Ｉ地区の調査 ……21
（3）Ｌ地区の調査 ……31
（4）Ｊ地区の調査 ……36
（5）Ｋ地区の調査 ……45
5．まとめ……49

挿図目次

図1　調査地周辺の遺跡分布図（S=1：25000）
図2　調査配置図（S=1：3000）
図3　H地区　北壁断面図（1/100）
図4　H地区　遺構平面図（1/300）
図5　H地区　SE3702，4033　平面図・断面図（1/50）
図6　H地区　掘立柱建物　平面図・断面図（1/120）
図7　H地区　SE4095　平面図・断面図（1/40）
図8　H地区　SE4072　平面図・断面図（1/50）
図9　H地区　SE4143　立面図・断面図（1/80）
図10　H地区　SE4057　平面図・断面図（1/50）
図11　H地区　SK4140・3706　平面図・断面図（1/40）
図12　H地区　河道　平面図（1/400）
図13　H地区　出土遺物実測図（1）
図14　H地区　出土遺物実測図（2）
図15　H地区　出土遺物実測図（3）
図16　H地区　出土遺物実測図（4）
図17　H地区　出土遺物実測図（5）
図18　I地区　遺構平面図　上層（1/750）
図19　I地区　遺構平面図（1/300）
図20　I地区　SE5426　平面図・断面図（1/30）
図21　I地区　SE5433　平面図・断面図（1/30）
図22　I地区　掘立柱建物　平面図・断面図（1/40）
図23　I地区　SE5428　平面図・断面図（1/40）
図24　I地区　SE5429，5431　平面図・断面図（1/30）
図25　I地区　SE5424　平面図・断面図（1/30）
図26　I地区　西端河道　平面図(1/400)
図27　I地区　出土遺物実測図
図28　L地区59トレンチ　遺構平面図（1/200）
図29　L地区59トレンチ　南壁断面図（1/100）
図30　59トレンチ　遺構平面図　上層（1/400）
図31　59トレンチ　河道　平面図（1/200）
図32　L地区60トレンチ　遺構平面図（1/200）
図33　L地区60トレンチ　南壁断面図（1/100）
図34　60トレンチ　出土遺物実測図
図35　60トレンチ　SK5059　平面図・断面図（1/30）
図36　60トレンチ　SX5057　土器出土状況（1/40）
図37　J地区　遺構平面図（1/300）
図38　J地区　西壁断面図（1/100）
図39　J地区　遺構平面図　上層（1/750）
図40　J地区　SD4261　土師器杯・墨書土器出土状況（1/20）
図41　J地区　SE4303，4305　平面図・断面図・立面図（1/20）
図42　J地区　下層　河道面　平面図（1/400）
図43　J地区　河道内杭列　平面図・立面図（1/40）
図44　J地区　SK4531　木製品出土状況（1/40）
図45　J地区　出土遺物実測図（1）
図46　J地区　出土遺物実測図（2）
図47　K地区　遺構平面図（1/200）
図48　K地区　南壁断面図（1/80）
図49　K地区　遺構平面図　上層（1/400）
図50　K地区　SX6331，6332，6333，6334　平面図（1/100）
図51　K地区　SE6306（1/25）
図52　K地区　河道　平面図（1/300）
図53　K地区　出土遺物実測図

写真目次

写真1　釣瓶（SE4095出土）
写真2　子持勾玉（SE5428出土）
写真3　有孔円盤（素掘溝出土）
写真4　銅銭（SR6305出土）

図版目次

巻頭図版1　H地区SE4095出土木簡

巻頭図版2　1．H地区SE4095検出状況
　　2．H地区SE4095西半裁遺物出土状況（西から）

図版1　調査地遠景（北東から、後ろに二上山を望む）

図版2　H地区（1）1．H地区全景（南から）
　　2．掘立柱建物1（南から）
　　3．掘立柱建物2（東から）
　　4．上層素掘溝（南から）
　　5．河道（東から）

図版3　H地区（2）1．SE3702石出土状況（南から）
　　2．SE4057（東から）
　　3．SE4033土器出土状況（東から）
　　4．SE4033下底曲げ物（西から）
　　5．河道埋土内出土大木及びSE4143（東から）
　　6．SE4143（西から）

図版4　I地区（1）1．I地区全景
　　2．掘立柱建物（北から）
　　3．掘立柱建物（北から）
　　4．素掘溝出土土器
　　5．素掘溝出土土器

図版5　I地区（2）1．SE5428掘形南半裁（南から）
　　2．SE5428井戸枠下段（北西から）
　　3．SE5428最下底（北から）
　　4．SE5426下底曲げ物（南から）
　　5．SE5424（南から）
　　6．SE5431（南から）

図版6　L地区59トレンチ
　　1．L地区59トレンチ全景（東から）
　　2．上層I素掘溝（北西から）
　　3．トレンチ東半遺構（西から）ら）
　　4．上層II素掘溝　SD5029出土土器（南から）
　　5．河道（北西から）
　　6．河道及び南西隅の岸（北東から）

図版7　L地区60トレンチ
　　1．L地区60トレンチ全景
　　2．SD5066・SX5057（南西から）
　　3．SK5059土器出土状況（南東から）
　　4．西南隅河道（西から）
　　5．下層河道内流木出土状況（西から）

図版8　J地区（1）1．J地区全景
　　2．上層素掘溝（北から）
　　3．南半遺構（北から）
　　4．SD4261出土土器（墨書）（西から）

図版9　J地区（2）1．SE4303（南から）
　　2．SE4303南半裁（南から）
　　3．SE4305（南東から）
　　4．SE4305南東半裁（南東から）
　　5．SK4531木器出土状況（南から）
　　6．SK4530（西から）

図版10　J地区（3）1．J地区河道
　　2．北東隅付近人の足跡
　　3．南端河道杭列検出（南西から）
　　4．南西沼状遺構内牛の蹄跡
　　5．南端河道杭列下底（西から）
　　6．南端河道内馬の頭骨出土状況
　　7．南端河道内土器出土状況

図版11　K地区（1）1．K地区全景（南から）
　　2．上層素掘溝
　　3．SX6332・6333・6334と東端流路（東から）
　　4．SE6306木杭出土状況（北から）
　　5．SE6306下底土器出土状況（北から）

図版12　K地区（2）1．北西隅河道
　　2．SD6305（東端流路）堆土
　　3．トレンチ東半遺構（西から）
　　4．西壁断面（南東から）
　　5．トレンチ南西隅ピット（南東から）

図版13　出土遺物（1）　H地区SE4095出土木簡（赤外線写真）

図版14　出土遺物（2）　H地区出土木製品

図版15　出土遺物（3）　H地区出土石器
　　H地区出土縄文土器

図版16　出土遺物（4）　I地区出土木製品

図版17　出土遺物（5）　L地区60トレンチ出土石器
　　L地区60トレンチ出土縄文土器

図版18　出土遺物（6）　J地区出土木製品

図版19　出土遺物（7）　K地区出土石器
　　K地区出土縄文土器

図版20　航空写真　昭和36年撮影の航空写真
　　昭和22年撮影の航空写真

1．はじめに

本書は、平成17（2005）年6月27日から平成18（2006）年３月29日までの期間に、下田東３丁目７番地の２他において実施した発掘調査の概要報告書である。

調査面積は、H地区が1,392㎡、Ｉ地区が1,682.5㎡、J地区が1,000㎡、K地区が336㎡、59トレンチ（L地区）が192㎡、60トレンチ（L地区）が162㎡の計4,764.5㎡である。

調査期間は、H地区が平成17年6月27日～9月22日（実働54日）、Ｉ地区が平成17年11月7日～平成18年3月29日（実働64日）、J地区が平成17年9月26日～平成18年1月24日（実働66日）、K地区が平成18年1月16日～3月8日（実働33日）、59トレンチ（L地区）が平成17年8月19日～9月22日（実働17日）、60トレンチ（L地区）が平成17年11月14日～12月16日（実働22日）である。

2．位置と環境

香芝市は、奈良県の北西部を占める奈良盆地の西部に位置し、標高517.2mの二上山（雄岳）の東部一帯に広がる扇状地に中心部がある。行政的には、北は王寺町、南は葛城市や大和高田市、大阪府太子町、東は北葛城郡広陵町、同上牧町、西は大阪府柏原市、同羽曳野市と接する総面積24.23㎢の町である。下田東遺跡の所在する市の南東部は、大和川の一支流である葛下川沿いに形成された沖積低地にあたるが、なかでも、下田東遺跡は香芝市南東部を北流する初田川・山崎川・熊谷川が葛下川に合流して形成された標高51～53mの低平地に立地し、また、調査地のすぐ北東には馬見丘陵の南西裾がせまっている。

遺跡の立地する市の南東部は、宅地開発が進む10年程前まで10～11世紀に奈良盆地で施行された条里地割が明瞭に残る水田地帯であり、さらに、近鉄五位堂車庫の北側の下田東３丁目から狐井に広がる当遺跡もまた、区画整理事業が平成13年度から行われる直前は上記の旧耕作地が広がっていた。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代では前期の北白川下層式～大歳山式の土器や石器が出土した狐井遺跡のほか下田遺跡がある。瓦口森田遺跡は旧河道から後期末の宮滝式～滋賀里Ⅰ式の土器が出土しているが、確実な遺構を伴ったものではない。鎌田遺跡は晩期の突帯文土器が出土している。

弥生時代は希薄で、鎌田遺跡で前期末から中期の土器が出土したほか、法楽寺山遺跡で後期の土器を伴った土坑の検出例と、近年調査された下田東１丁目に所在する下田味原遺跡の弥生時代後期の土器が出土する流路跡が知られるのみである。

古墳時代になると、護岸遺構などが検出された前期～中期の鎌田遺跡や、中期から後期の集落跡が見つかった藤ノ木丁遺跡などがある。また、馬見丘陵南端部は市内でも多くの古墳が分布しており、著名なものとしては、前期では別所城山２号墳、中期では別所石塚古墳などがある。狐井台地では中期末の狐井城山古墳が知られる。

７世紀以降においては周辺で目立った遺跡はなく、そのため、この下田東遺跡が際立った様相を呈している。

中世には平地に荘園「平田庄」が開発され、また、丘陵上には瓦城跡や鈴山城跡、下田城跡、古墳を利用した狐井城跡が築かれ、良福寺環濠や五位堂環濠、瓦口環濠などが成立する。

近世になると、下田にかわって五位堂で鋳物産業が栄えた。下田鋳物師は13世紀中頃から18世紀初頭にかけて広く中部・東海から近畿地方を基盤に活躍したとされる。五位堂鋳物師は、下田鋳物師に遅れる16世紀末から17世紀初頭にかけて台頭したとされる。

1. 遺物散布地
2. 下田東遺跡(周知範囲)
3. 遺物散布地
4. 下田遺跡
5. 瓦口森田遺跡
6. 勘平山第１号地点
7. 勘平山第１号地点
8. 御坊山第１号墳
9. 御坊山第２号墳
10. 真美ヶ丘59地点
11. 鈴山城跡・鈴山遺跡
12. 御坊中第１号墳
13. 御坊中第２号墳
14. 御坊中第3号墳
15. 長谷山古墳
16. 瓦城跡
17. 坊主山古墳
18. 土山古墳
19. 瓦口環濠
20. 別所城山第1号墳
21. 別所城山第2号墳
22. 別所石塚古墳
23. 遺物散布地
24. 遺物散布地
25. 五位堂環濠
26. 八王子古墓
27. 狐井稲荷古墳
28. 狐井城山古墳
29. 狐井遺跡
30. 良福寺環濠
31. 鎌田環濠
32. 鎌田遺跡
33. 散布地
34. 石田遺跡
35. 磯壁遺跡
36. 藤ノ木丁遺跡
37. 今池遺跡
38. 藤山遺跡
39. 藤山第１号墳
40. 藤山第2号墳
41. 北今市古墳群
42. 下田味原遺跡
43. 法楽寺山遺跡
44. ケシキ山第3号墳
45. 散布地
46. 「顕宗陵」治定地
47. 散布地
48. 山口遺跡
49. 上中ヨロリ第１・２号墳
50. 山口古墳
51. 散布地
52. 岡氏居館跡
53. ヘモンド城跡
54. 威奈大村墓
55. 逢坂城跡

図１　調査地周辺の遺跡分布図（S=1：25,000）

3．調査の契機と経過

下田東遺跡は、1978年に水路改修中に採集された縄文時代早期の高山寺式土器（写真１）によってその存在が知られるようになった。採集されたその他の土器などから、縄文時代早期～晩期、弥生時代後期、古墳時代、中近世の遺跡が下田東３丁目および大字狐井にかけての地域に広がると考えられていたが、今日まで発掘調査が行われる機会はなかった。

調査は、五位堂駅前北第二土地区画整理事業の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成13年度（第１次調査）から香芝市教育委員会が継続して行っている。初年度は試掘・確認調査を行い、14年度以降は年度ごとの工事区域に従って試掘・確認調査及び本調査を実施している。平成17年度は５年目（第５次調査）となる。

当初、開発予定区域には遺跡地図[1)]において周知の埋蔵文化財包蔵地である下田東遺跡・瓦口森田遺跡・未命名の遺物散布地２ヵ所を含む合計４ヵ所が含まれており、開発予定区域内の試掘・確認調査（第１次調査に相当）を行ったところ、縄文時代から中世にわたる遺構の検出や遺物の出土が各所に見られ、埋蔵文化財に影響を与えることが予測されたため本調査を実施することとなった。なお、「下田東遺跡」は、前述の周知の埋蔵文化財包蔵地４ヵ所のうち西半部とされていたが、調査によって判明した遺跡の分布や遺構、遺物の検討を行った結果、現熊谷川を境として西方を下田東遺跡とし、東方を瓦口森田遺跡と仮称している[2)]。

以下、過去４ヵ年の調査の概要を述べる。

平成13（2001）年度（第１次調査）は、事業地北側を中心に総面積6,097㎡を調査した。第１次調査はすべて試掘・確認調査としてトレンチ掘りを行った。その結果、５世紀末（古墳時代中期）に築かれた墳丘長21mの帆立貝式古墳（下田東古墳）を確認し、その周濠から円筒埴輪のほか馬見丘陵南西側において初めて家や鶏、馬、人物などの形象埴輪が出土した。また、古墳の南側では幅15m、深さ1.8mの旧河道を検出し、出土した土器から５～10世紀（古墳～平安時代）の旧河道であることが分かった。この旧河道からは土器のほか軒瓦や鴟尾、塼、凝灰岩切石、墨書土器、人面墨書土器、斎串、乾元大宝などが出土したことから、周辺に寺院を含めた官衙的施設の存在が考えられた。また、別の旧河道内からは、堰のように杭を並べた遺構が検出されたり、馬鍬や円面硯などの遺物が出土している。

平成14（2002）年度（第２次調査）は、事業地西側を中心に14,622㎡を調査した。その結果、微高地上に５世紀末～６世紀初頭の溝で周囲を区画する３間×３間の総柱建物群を検出した。また、この北東側を蛇行する旧河道の上層では、総柱建物群と同時期のおびただしい量の土師器や須恵器が完形で出土した。微高地上では７世紀以降も建物群が形成されており、なかでも８～10世紀は大型建物がみられ、石帯も出土したことから、官衙的施設の可能性が考えられる。また、旧河道下流域の調査では４世紀前半～６世紀中頃の土師器や須恵器が出土し、そのさらに下層では縄文時代前期や後・晩期、弥生時代前期の土器や石器が出土した。

平成15（2003）年度（第３次調査）は、前年度の調査地西側の残りと事業地東側を中心に、8,596㎡を調査した。事業地東側の調査では、長さ96mの東西方向の大溝と、その大溝の両端と中央から南に延びる南北方向の大溝３条を長さ20m分にわたって検出し、環濠居館の濠であると考えられた。濠の内側は盛土がされ、西側では建物跡が１棟見つかっている。出土遺物は室町時代の瓦質土器の羽釜や火鉢、土師器皿などである。また、同じ調査地では幅20～30mに及ぶ南東から北西方向に流れる旧河道が見つかり、第１次調査で検出した旧河道に繋がることを確認した。ここでも第１次調査の旧河道内で見つかった杭による構造物が複数見つかっている。河道内には大量の土師器や須恵器のほか塼や軒瓦など古代寺院に

関すると考えられる遺物が含まれていたのと同時に、墨書土器や人面墨書土器、斎串、土馬、馬歯など律令祭祀に関すると考えられる遺物が出土している。

平成16（2004）年度（第4次調査）は、前年度調査した事業地東側の調査地を掘り下げ、さらに古い時期の旧河道を確認した。この河道に含まれる遺物は4～6世紀にかけてのもので、木製の鞍（後輪）や鐙、建築部材などが見つかった。鞍は直近の遺物が5世紀前半の布留式土器であることから、この時期のものであると考えられる。このほか、平成16年度は事業地南のトレンチ調査と事業地中央の調査も行い、飛鳥時代～平安時代の建物群や井戸などが見つかっている。

註

1）香芝市教育委員会編　2001『香芝市遺跡地図（平成13年度改訂版）』

2）香芝市二上山博物館編　2006『下田東遺跡発掘調査概報Ⅰ-平成13・14年度-』香芝市埋蔵文化財発掘調査概報21　香芝市教育委員会

参考文献

・香芝市二上山博物館編　2005『平野2号墳－葛城地域北部における終末期古墳の調査－』香芝市文化財調査報告書第6集　香芝市教育委員会

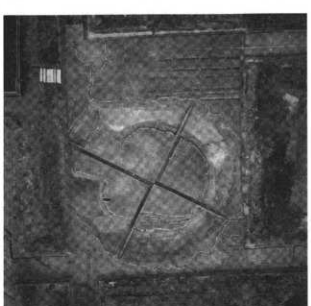
・香芝市二上山博物館編　2005『大和下田・五位堂鋳物師遺品文化財調査』かしばの文化財⑯　香芝市教育委員会

・香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館編　2003『下田東遺跡』五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う平成13・14年度発掘調査の成果、香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館

・香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館編　2005『下田東遺跡』五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う平成15・16年度発掘調査の成果　香芝市都市整備部区画整理課

・香芝市二上山博物館編　2006『下田東遺跡発掘調査概報Ⅱ-平成15・16年度-』香芝市埋蔵文化財発掘調査概報22　香芝市教育委員会

下田東遺跡採集の押型文土器



下田東古墳（第1次調査）

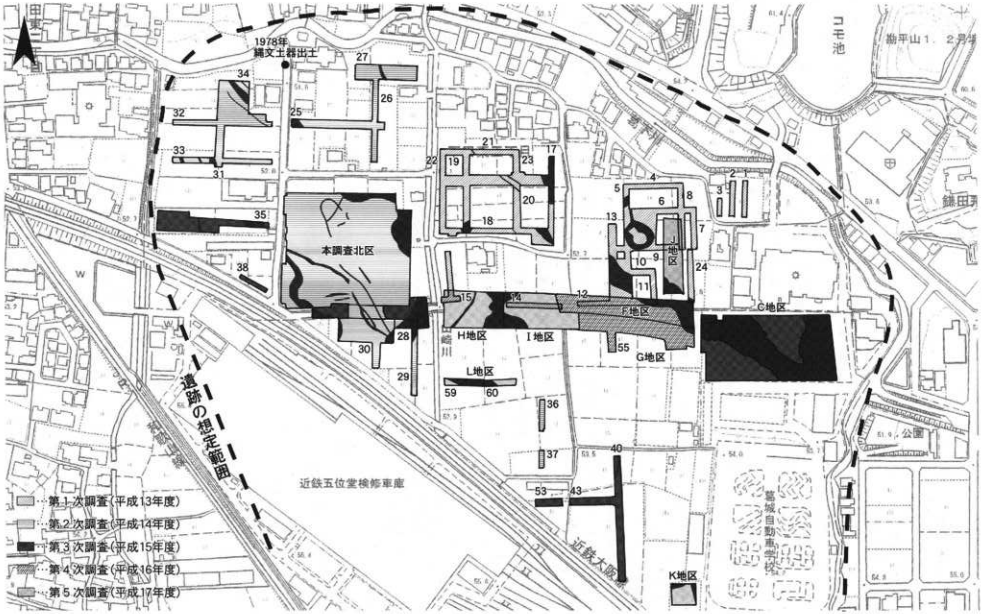


図2　調査配置図（S=1:3000）

4．各調査区の概要

平成17年度は4,764.5㎡を調査した。以下、その概要を述べる。

（1）H地区の調査

この調査区は、事業地のほぼ中央にあたる。調査区は第１次調査の試掘トレンチ（16トレンチ）と一部重なっている。葛下川付け替え工事によって地山まで掘削される計画になっており、埋蔵文化財に影響を与えることが予想されたため、新葛下川とその遊歩道になる新河川工事区域地に調査区（南北29m・東西48m・面積1,392㎡）を設定し、調査を実施した。調査は平成17年6月27日に開始し、9月22日に終了した。遺物の取り上げは第３次調査のC地区で設定した５mのグリッド枠を引き続き利用して行った。

現地表面は現代水路や地盤改良、コンクリート壁など区画整理事業以前の障害物を除去した後遺構面を検出した。遺構総数は約450基で、掘立柱建物や井戸、ピットなどが見つかっており、平安時代から鎌倉時代を中心とする時期の居住域が形成されていたと考えられる。次に、遺構面のベース層となっている自然河道を検出し、それ以下は無遺物層であることを確認して調査を終了した。出土遺物はコンテナ約80箱分である。

〈基本層序〉

原地盤の高さは標高52.8～53.0mである。ただし、区画整理事業にともなう残土の積み上げや搬出が数度にわたって行われており、以前の旧地表高は定かではない。調査区のほぼ中央を東西方向に横断する現代水路の撹乱は深さ最大１mに達する。第１層は現代の整地土層、第２層は旧耕作土層で上層と下層に分かれる。重機掘削によってこれらの層を除去した面を第１遺構面とした。この面は調査区西半が地山（黄褐色シルト～粘土）、東半が河川の粗粒堆積物からなる。第１遺構面に至る旧耕作土層では、古代の遺物とともに、わずかに瓦器片や磁器片など中世から近世の遺物を含んでいた。

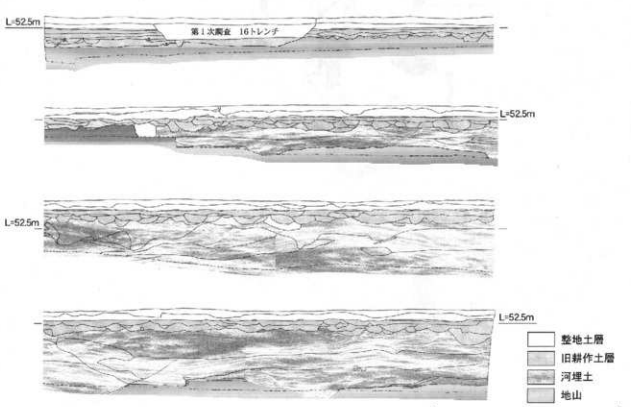


図３　H地区　北壁断面図（1/100）

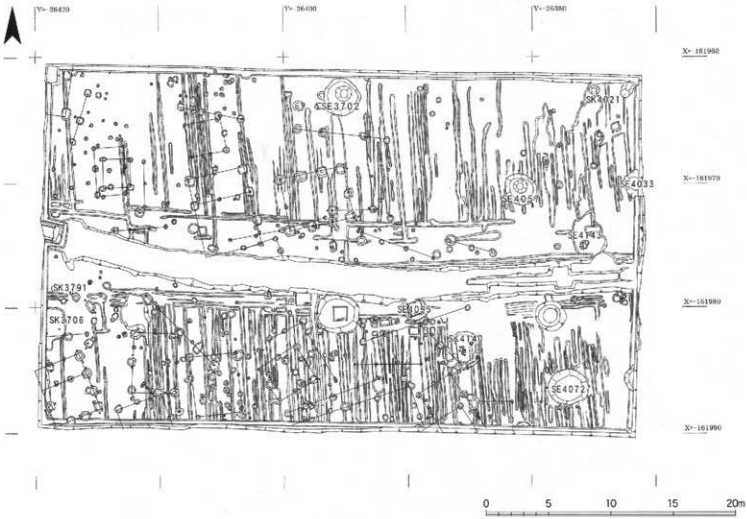


図4　H地区　遺構平面図（1/300）

〈平安時代後期～中近世の遺構〉

① 耕作溝

上層からの遺構で、ほぼ南北方向に80条ほど検出した。なかでも、調査区中央を東西方向に走る素掘溝については条里制による坪境溝の可能性が考えられる[1]。素掘溝埋土からは土師器や須恵器細片、下層からの混入と思われる埴輪片や臼玉（図13-1）、磨製石斧（図13-2）、瓦塼（図12-3）などが出土している。

② 井戸

SE3702（図５） 調査地中央の北端に位置し、平面形は東西2.9m・南北2.7mの楕円形、深さは検出面から1.6mの素掘りの井戸である。中からは土師器や須恵器、瓦器椀などとともに、砥石や大型の礫が出土した。礫は10～60cm程度の凝灰岩などコンテナ６箱分出土した。上層でまとまって出土しており、井戸の廃棄時に埋められたものと考えられる。煤が付着したものが多い。土器（図13）は、完形に近い土師器皿（4・6）と瓦器椀（6～8）のほか、羽釜の破片（9・10）が出土した。4・5はいわゆる「て」字状口縁の土器であるが、口径が10cm程度、厚みは５mm前後と分厚い。6～8はすべて口径15.5cm前後で、口縁端部には沈線がめぐる。調整は内面見込み部にジグザグのヘラミガキ、体部内面には圏線２mm以下の細かいヘラミガキを密に施す。外面は放射状の指頭圧痕の上から粗いジグザグ状のヘラミガキを体部の３分の２程度行う。いわゆる「大和型」の瓦器椀である。これらの遺物から井戸の廃棄年代は12世紀前半と考えられる。

SE4033（図５） トレンチ北東に位置し、東壁に接した井戸の西側半分を検出した。井戸の掘形は直径２ｍと推測され、深さは検出面から約95cmで、下層で井筒に転用された曲物が見つかった。曲物（図版14-152）は半面円形で、直径40cm、高さ最大25cm、厚み0.3～0.4cm、樹種同定の結果はヒノキ科

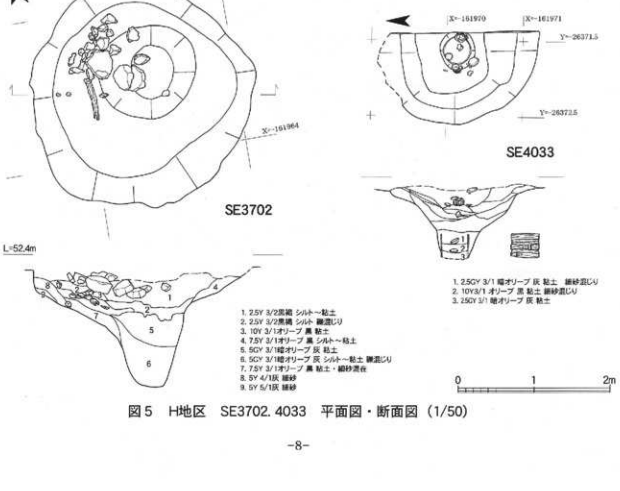


図５ H地区 SE3702. 4033 平面図・断面図（1/50）

キ科アスナロ属である。内面には板を曲げやすくするためのケビキが斜格子に行われている。側板の上端は失われており、箍（たが）は上下段（上段5.5cm幅、下段5cm幅）残っているが、上段はずり落ちた状態である。側板の樺皮結合は一列5段以上（4段と痕跡1段が残っている）、樽の結合は上下段ともに2列2段である。内面下端から1～1.5cmの部分が白いことから、曲物製作当初は底板があった考えられる。底板痕跡部分には5ヵ所の方形の釘穴が開いており、底板は釘で止められていたと考えられる。

土器（図13）は上層で土師器や瓦器、黒色土器などが出土した。完形のものが多く、また、一部が入れ子状になって出土したため、井戸廃棄時に何らかの祭祀を行った可能性が考えられる。曲物内埋土からも完形の瓦器椀が出土している。11は土師器小皿で皿と同じく外面の指頭圧痕が明瞭で分厚い。わずかに口縁端部が「て」字状になる。同じく12・13は11と類似する土師器の小皿であり、外面の口縁をヨコナデするが「て」字の屈曲はみられない。14～17はいずれも口径が15cm前後の土師器皿で、外面の指頭圧痕が明瞭である。厚みは5～6㎜程度と分厚い。外面の口縁部は強いヨコナデを行い、口縁端部は15～17が外反し、14はわずかに端部を丸める。18は厚手の椀である。20は瓦器小皿で、口径が約10cm、内面見込み部にジグザグ状のヘラミガキを密に施し、体部内面には2㎜以下の細かな圏線状のヘラミガキを密に行う。外面はヨコナデでミガキは見られず、外面底部は指頭圧痕が残る。19は黒色土器皿で20と形や法量が類似するが、口縁の外反するところが異なる。内外面には横方向のヘラミガキを行う。内面見込み部にわずかにミガキを行った痕跡が見られるが磨滅しておりわからない。21～24は口径15.5cm前後の大和型の瓦器椀で、口縁端部に沈線を施し、体部内面に2㎜以下の圏線状の整ったヘラミガキを密に行う。21は内面見込み部に粗いジグザグ状のヘラミガキを行い、体部外面は分割ヘラミガキが密に施される。22は内面見込み部にジグザグ方向を変えて重ねた斜格子状のヘラミガキを、体部外面には隙間のみられる分割ヘラミガキを行う。26のヘラミガキの幅は太い。25は瓦器椀の底部である。土器の年代から井戸の廃絶が11世紀末から12世紀初頭頃と考えられる。

〈飛鳥・奈良・平安時代前期の遺構〉

① 掘立柱建物

素掘溝を除く約450基の遺構中、そのほとんどが柱穴である。遺構面は中世素掘溝により柱痕の残る柱穴が数多く見つかっており、現在復元中である（図6）。建物は西傾するものやほぼ正方位のものが復元できるが、西傾するものの中でも方位が異なることから時期差の可能性がある。

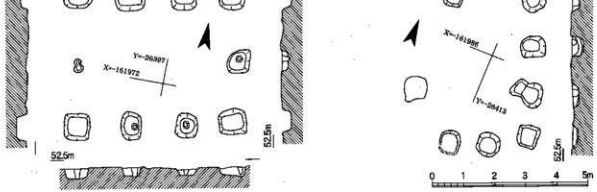


図6　H地区　掘立柱建物　平面図・断面図（1/120）

② 埋納遺構

古墳時代の土器が埋納されたSK4021や石と土器片が埋納されたSK3791などの埋納ピットが検出されており、今後検討する必要がある。

③ 井戸

SE4095（図7） 調査区中央に位置し、トレンチ中央を東西に横断する現代水路跡により北の掘形の一部が破壊されていたが、井戸の掘形は1.9m程度の隅丸方形になると考えられる。さらに、検出面から60cm程掘り下げたところで一辺1.2mの方形の井戸枠が見つかった。井戸枠の残存する深さは1.6mになる。隅柱横桟横板組という、隅柱に横桟を渡し外側に横板を積み上げた構造で作られていた。上部構造は不明だが、南東隅に一本、横板のさらに外側に約55cmの長さの柱が残っていたことから、さらに50cmは井戸枠があったことになる。井戸枠の横板は横方向が約1.2m、縦の長さが12～30cm、厚さは10cm程度の板を使用している。樹種同定の結果ブナ科シイ属であることが分かった[2]。枠内の埋土は灰色粘土で4層に分かれる。中層からは斎串や木簡、墨書土器、打欠きのある土器などが完形でまとまって出土した。また、最下層でも完形の土器がまとまって出土しており、井戸は廃棄時に一気に埋め戻されたと考えられる。

写真1 鈎瓶（SE4095出土）

枠内の出土遺物の説明を行う（図14・15）。土器は、土師器の甕（33～40）を中心に土師器の皿（28～31）や杯（27）、須恵器の長頸壺（42～45）が見つかった。完形の土器が多い。31は外面をヘラケズリした後、丁寧にヨコミガキを行う。底面に半分のみ平行ミガキが見られるが粗い。底部中央に墨書が見られる。口縁は一部を打ち欠く。32は黒色土器皿A類（内黒）で破片が1点出土した。口径は復元で15.4cm、器高は2.7cmと浅い。外面の上半と内面全面を黒化処理する。焼成は良好で堅緻、硬質であり、この遺跡でよく出土している軟質の黒色土器とは趣きを異にする。外面はヘラケズリと口縁部をヨコナデで仕上げた後、内外面とも細かで丁寧なヨコミガキを施し、さらに見込み部から体部にかけてやや粗雑な輪花状暗文を施す。33～40はほぼ同じ作り方で時期差は見られない。口縁は外反したのち、端部を内側に強く折り曲げる。34以外は外面に不定方向のハケメを行うが、34のみハケメが見られない。外面上半には当て具の痕跡を残すものも多い（34・35・37・40）。内面の調整は、指押さえの後板ナデを行うが、40は弱い板ナデのため指頭圧痕が明瞭に残る。これらの中には底部を穿孔した36や口縁を打ち欠いた38が含まれている。ひとまわり小型の33は中層で出土したが、出土時に植物遺体（アミカゴ）が部分的に付着していたため、鈎瓶として利用されていたことが考えられる（写真1）。42～45のうち、43～45はわざと口縁を打ち欠いている。42は口縁の破片である。これらの土器の年代は平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭）であると考えられる。

46は壺である。瓦製で灰白色、焼成は良好で硬い。大きさは幅が約14cm、長さが13cm以上、厚さが4cmの長方形である。片面はケズリを行うが、平行タタキがわずかに残っていた。もう一方の面は型に砂を敷いたのか、ざらざらしているが平滑で調整を行わない面である。また、井戸の上層からは不明鉄製品（41）が出土しているが、外面は錆で覆われている。

井戸からは木製品も多く出土している。曲物底板片、斎串、木簡、甕類、桃の種などである。斎串（図15・図版14）は上層下端に1本（47）、中層に8本（48～55）、下層に2本（56・57）の計11本見つかった。短冊状の木製品で、薄い板の先端を圭頭状に削り下端を尖らせている。大きさは3種に大別でき、長さ18～20cm、幅2.0～2.8cmの大型の斎串が8本、長さ15～17cm、幅2.0～2.2cmの中型の斎串が2本、長さ12cm、幅が2.3cmの小型の斎串が1本である。樹種同定の結果、斎串はすべてヒノキ科アスナロ属であることが分かった。なお、井戸枠内からはウメとモモの核が出土した。

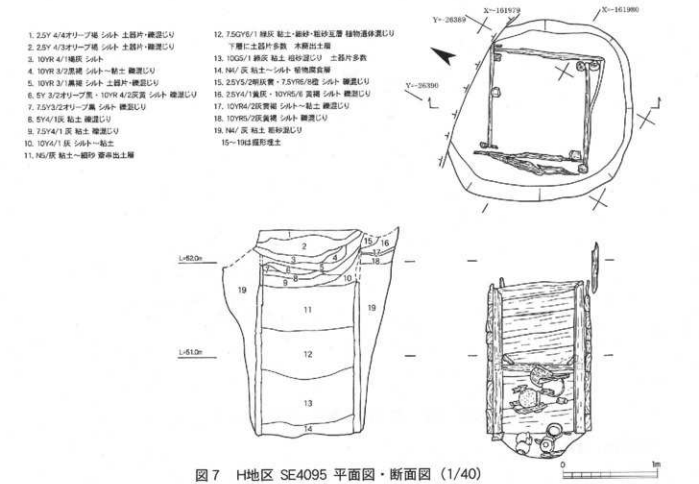


図７　H地区 SE4095 平面図・断面図（1/40）

木簡[3]（巻頭図版１、図15－58、図版13)は長さ36.8cm、幅11.1cm、厚さ0.5～1.0cmで、中層の遺物集中地点で出土した。長辺４ヶ所と短辺１ヶ所に穿孔があり、孔には植物遺体が残存している。形状から曲物の底板（樺皮結合曲物B[4]）を転用したと考えられ、樹種同定の結果ヒノキ科アスナロ属と判明している。両面に墨書されているが、横長に板をおいて文字を書いた面をａ面[5]、縦長に板をおいて文字を書いた面をｂ面[6]とする。板の表面には刀子で削った痕跡があり、また文字が重なって書かれている。木簡から分かることは、①木簡の記述は、供伴した遺物や状態から平安時代初頭のものであると考えられること。②種蒔きや稲刈りなどの農作業の記録や何らかの商品の売却記録など、一つの木簡に複数の文書があること、桶の底板などのようなものを転用して字を書いていることなどから、この木簡は文書を書く前の下書きであったと考えられること。③解の記載方法は公文書の書式に則っており、木簡に記載されている「伊福部連豊足」は公的組織に関係した人物であることが推測でき[7]、下田東遺跡が公的機関であった可能性がより濃厚になったこと、である。

井戸堆土の最下層から中層にかけて斎串や木簡、墨書土器、打欠きのある土器などが完形でまとまって出土し、それらの土器には時期差が見られないことから、井戸廃棄時に井泉祭祀が行われたと考えられる。出土した土器の年代から平安時代初頭の廃絶と考えられる。

SE4072（図９）　調査区の南東、河川堆積層上に位置する南北3.3m、東西29mの楕円形の素掘りの井戸で、深さは検出面から50cmと浅く、埋土下層にはオリーブ黒色の粘土が溜まっていた。遺物（図16）は７世紀中頃の杯Ｇ蓋（59）が下限となり、このころに廃絶したと考えられる。土師器の杯（60）は内面に放射状暗文、見込み部にラセン状暗文をもつ。このほか、須恵器の杯Ｈ身や土師器の把手付甕（61）、甕Ｂ縁などの破片が出土した。

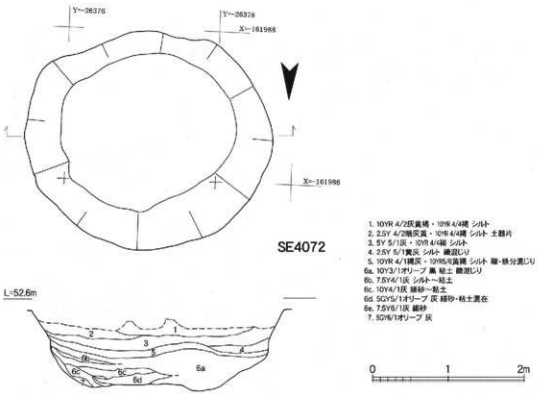


図８　H地区 SE4072平面図・断面図（1/50）

〈古墳時代の遺構〉

i. 井戸

SE4143（図９）　調査区北東に位置するSE4143は丸太を刳り貫いて井戸枠とする刳貫き井戸である。井戸は河道埋土掘削中に検出したもので、掘形は未確認である。井戸枠の大きさは直径45cm、残存高が最大57cm、厚さ３～５cmで、表面には４～７cm幅の削り痕跡が内外面ともに見られた。枠内の埋土は２層に分かれる。井戸枠内部にはコンテナ１箱分の土器が埋土とともに詰め込まれた状態で出土した。土器（図16）はほとんどが１～３cm程度の細片であり、人為的に割られたものと考えられる。土師器の甕の破片は底部２個体分復元ができた。土師器の口縁の破片は小型丸底壺と広口壺口縁などである。須恵器は杯H蓋の他波状紋を施す口縁の破片（62）と、はそう体部の破片（63）が出土した。62と63は、頸部の直径が同一であることから、別個体ではあるが同形である可能性が高い。他に、小玉（64）や有孔円盤（65）、木製の竪櫛（66）（図版16）が1点づつ出土した。64は直径が5.5mmで、高さが２mm、穴の直径は２mmで色調は灰白色である。65は滑石製で一部欠損している。大きさは縦1.5cm、横２cmで厚みは４mmである。66は縦2.4cm、横3.0cm、厚み４mmの竹ひごをアーチ形に折り曲げて束ねた結歯式の櫛で、歯の部分は欠損している。表面には黒い漆が残存していた。土器とともにスモモとモモの核が出土した。須恵器がTK23型式前後に相当することから、５世紀後半の井戸であると考えられる。

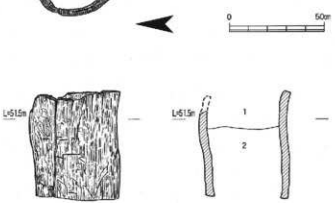


図９　H地区 SE4143立面図・断面図（1/80）

SE4057（図10）　調査地の北東に位置する南北2.6m、東西2.5mの不整形の井戸で、深さは約１mである。下層の埋土の状態から井筒を設けていた可能性がある。上半部分は約10㎝の厚さで水平堆積しており、徐々に井戸が埋まったと考えられる。ただし、最上層（１・２層付近）からはたくさんの土器片が出土していることから、上端は井戸とは別の性格を考える必要がある。遺物（図16）は土師器杯（73・74）や甕（75）、ミニチュア椀（72）、須恵器杯H蓋（67）や杯H身（68）、高杯脚部（69）、はそう（70）、甕（71）の他、磨製石斧（76）が出土した。67の上面にはヘラによる線刻がみられる。須恵器がTK23型式と考えられることから、最上層の土器の年代は５世紀後半と考えられる。なお、埋土からはモモの核が出土している。

ii．土坑、土器溜まり

第１面に至る包含層は素堀溝の耕作によって失われているものと見られるが、調査区南西端

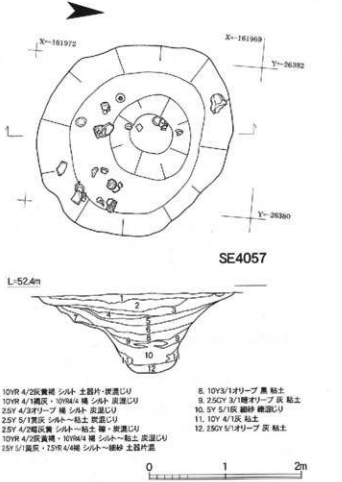


図10　H地区　SK4057 平面図・断面図（1/50）

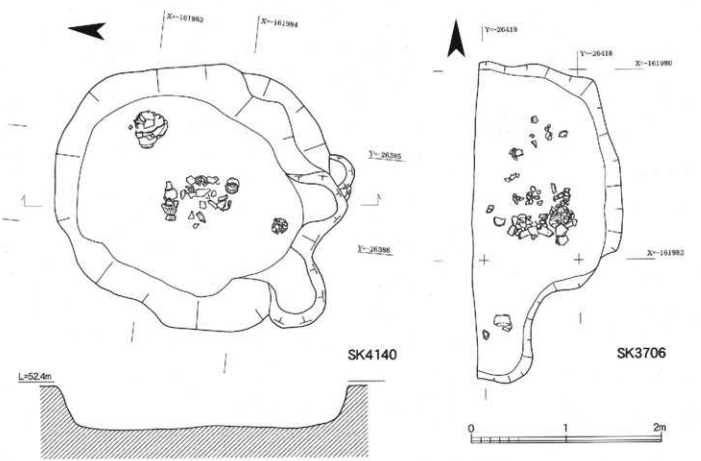


図11　H地区　SK4140. 3706 平面図・断面図（1/40）

に褐灰色シルト～粘土層が堆積した土器溜り遺構が検出され、生活面と考えられる部分が一部残存していた。

SK4140（図11）　調査区南東に位置する。南北3.1m、東西2.8m、深さが検出面より約50cmの不整形の土坑で、須恵器杯H蓋（77）や杯H身（78・79）、高杯（80）、はそう（81）、土師器壷（82・83）や長胴甕（84・85）、製塩土器の破片など、たくさんの遺物が見つかった（図16）。84は口縁を強くナデて稜をつくる。85は底部がやや尖底であり、口縁も外反せずに直立する。ハケは粗い。完形の土器が多く、83と84は一部を打ち欠くなど何らかの祭祀に用いられたと考えられる土器が含まれる。須恵器はTK208型式からTK23型式に相当し、５世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

SK3706（図11）　調査区南西でみつかった土器溜まりで、西側は調査地外へと続く。検出した大きさは南北33.5m、東西15.5m以上で、深さは10cm程度である。出土した遺物（図16）は、須恵器杯H身（86・87）のほか土師器の甕や高杯、製塩土器や埴輪の破片などである。古墳時代後期の遺構と考えられる。

〈古墳時代以前の遺構〉

調査地東半から深さ約70～90cmの旧河道（図12）を検出した。旧河道は幅15m以上で調査区を縦断しさらに東側に延びている。河道に削られたベース層は青灰色粘土からなり、無遺物層と確認した。断面から数回にわたる堆積が見られ、一定期間流路となっていたことが考えられるが、遺物は底部に縄文土器細片とサヌカイト片（図17、図版15）がわずかに出土するのみである。調査区中央に南北方向に延びる流路は幅１～２m、深さ約１mである。幅に対して深さが深く溝状を呈し、人為的な掘削によるものとも考えられたが、自然堆積物で充填されており遺物を含まないため自然流路とした。この流路中央は西へと別の流路につながるが、この流路もまた無遺物であることを確認した。

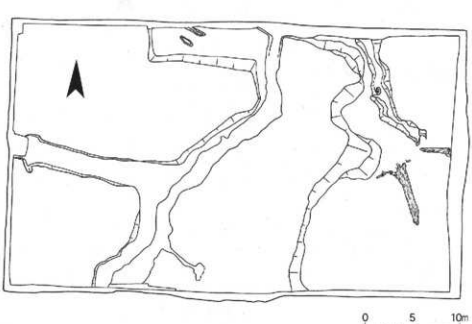


図12　H地区　河道　平面図（1/400）

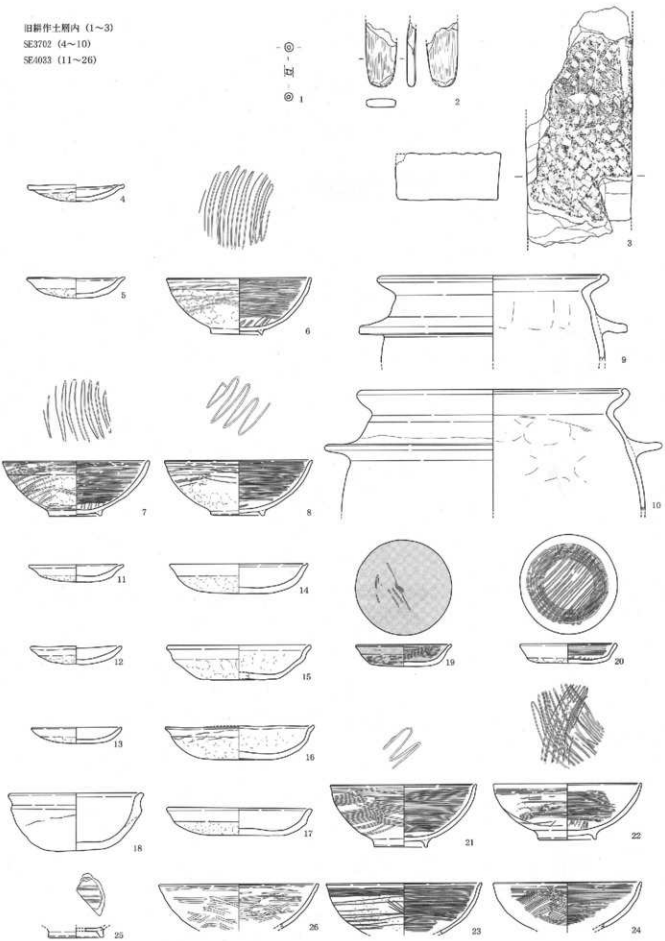


図13　H地区　出土遺物実測図（1）（1以外すべて1/4、1は1/2）

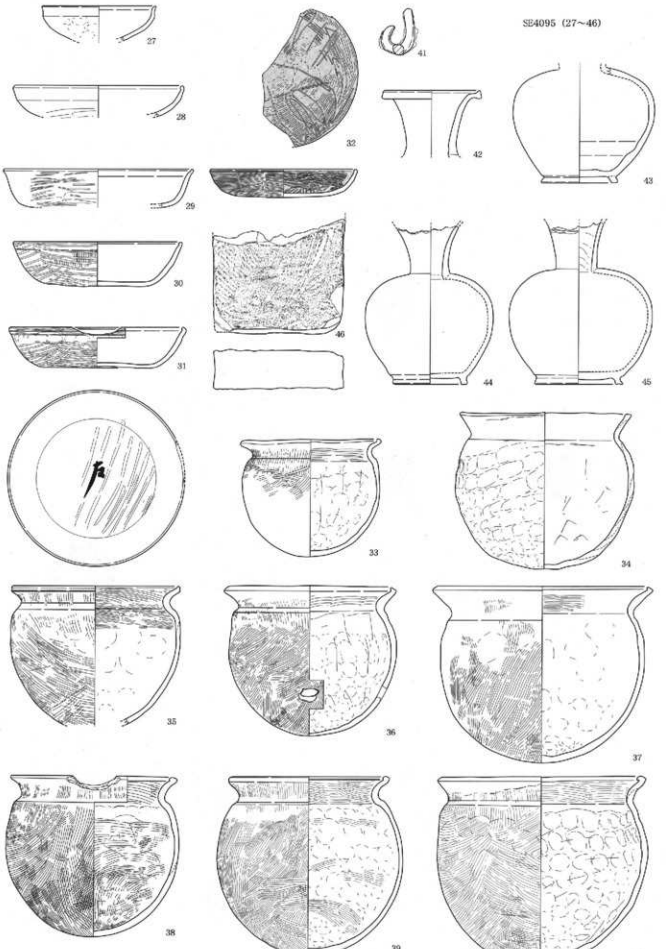
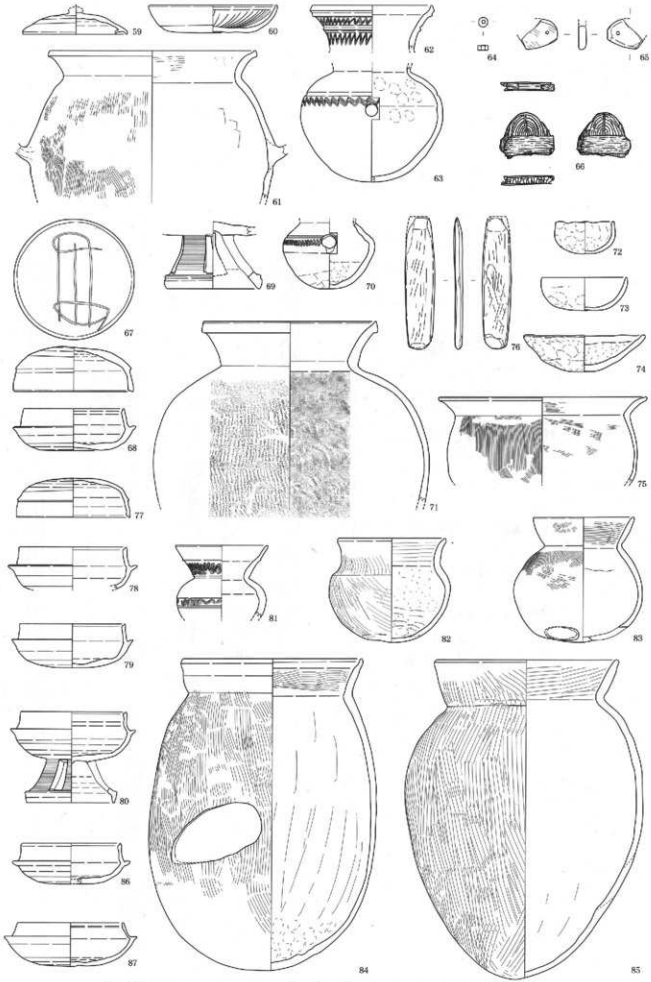


図14　H地区　出土遺物実測図（2）（すべて1/4）

図15　H地区　出土遺物実測図（3）(47～57は1/4、58は1/2)



SE4072 (59~61)、SE4143 (62~66)、SE4057 (67~76)、SK4140 (77~85)、SK3706 (86~87)

図16　H地区　出土遺物実測図（4） (64~66以外1/4, 64~66は1/2)

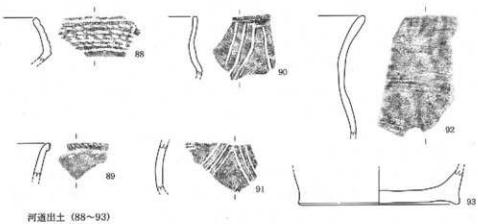


図17　H地区　遺物実測図（5）　（すべて1/4）

註

1）『大和国条里復原図』で坪境がこの付近に推定されており、周辺の旧地形から考えても近年まで坪境が残り利用されていた可能性が高い（図版20）。また、区画整理事業が始まる前までにここに小道があったと言う。

2）シイ属にはツブラジイとスダジイがある。

3）木簡の釈文作成およびその意義付けには、橿原考古学研究所の赤外線写真撮影の協力を得て、同研究所研究員鶴見泰寿氏と、京都教育大学教授和田萃氏に多大なご尽力を頂いた。さらに、木簡学会では会員の方々から多くのご指摘・ご教授を頂いた。記して感謝したい。

4）奈良国立文化財研究所編　1993「曲物」『木器集成図録』近畿古代編　奈良国立文化財研究所の分類を使用。

5）a面には、「小支石（：人名）」が七月十二日 十四日 十七日 判読できないその他２日の合計「五日」間の（早稲の）「田苅（：稲苅り）[a]」の「上日（じょうじつ：勤務日程）」を記述、その後「年魚（あゆ）」を「二百八十」匹売った記録と、その売り方として「前売（さきめ）六十」匹、「後売（あとめ）百六十」匹、「家売（やけめ）五十」匹、「[　]十」匹とし、合計が前述の280匹と合う[b]。その後「圖案」の意味は分からないが、「告麻呂」という人名が出てくる。残念ながらその後６行ほど続くが読めない。４ヵ所に合点「|」が施されていることから、この文章を推敲している様子が分かる。

6）b面には、右端に「和世（早稲）種」を「三月六日」に蒔くことや、「小須流女（こするめ）」を「十一日」に「蒔」くという記載がある。「小須流女」は稲の品種名という。右下の「臨傷臨位別口持」は習書したものである。上部中央には「種蒔日」と書かれているが、その下の文章は伊福部連の解文を書くために削って消されているため、わずかに文字が残っているが読めない。解とは律令に定められた公文書の様式のひとつで、下級官司が上級官司に上申する時に用いる書式であり、宛先は自明なので普通書かないため、ここでも宛名はない。当時の文書では、発給者・受取人及び文書の様式名などの次に内容を示す題名のような短文をつける規則があり、この解文「伊福部連（いおきべのむらじ）豊足（とよたり）解」にも「進上御馬事（：馬の事で進上します）[c]」と記載がある。以下、内容は「右（：＝豊足）」が「今日」「命」が危なく「死」にそうである。「依此（：したがって）」「御馬」を「飼」うことが「不堪（：たえられない）」。さらに続けて、「右仍豊足（：右の豊足）」は「重」い「病」で「御馬飼不堪」。「伏」して「乞」う、と先程の文章とほぼ同じ内容を書く。その後「畏公（かしこききみ）」に「不仕奉（：お仕えすることができない）」と続け、再度「至死在〻畏気公〻仕奉〻在□□」と書く。同じ文面を繰り返していることから、豊足の解文を推敲したことが分かる。

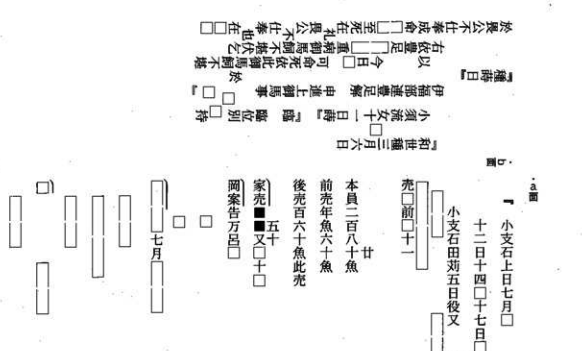
7）伊福部は藤原京、平城京および初期の平安京の12宮城門のひとつにその名が冠されており、軍事的氏族であったと考えられている。その本来の職掌としては「景行天皇の皇子五百木之入日子命の名代部の伴造氏族とみなす説のほか、天皇の食饌を煮焚する火吹部、笛を吹く吹部、鞴縄を掌る製鉄・製銅関係の息吹部の伴造」（「伊

福部氏」『日本古代氏族人名辞典』より抜粋）の諸説がある。平安時代初期には宿禰姓氏族が平安京と大和国に居住していたことが知られ、また、播磨国には連姓の豪族が多く住んでいたという（前掲書より）。真弓常忠氏は雄略天皇紀にみられる「湯人盧城部連武彦」の記載から、伊福部氏をタタラ炉の熔鉄を「湯」とする「火吹」とみなし、伊福部氏の本来の職掌をふいごによるタタラの操作にあり、製鉄技術集団を部民として管掌する氏族であったと考える。門号となったのも、伊福部氏がこのような職掌から当然兵器を保有していたと推察している（真弓1977）。もしこれが正しければ、後に下田・五位堂鋳物師を排出する当地との関係も今後考えていくべきであろう。

a）木簡には稲刈り及び種蒔きの事や魚を売る記述が見られた。木簡の書かれた年代である平安時代初頭の下田東遺跡の遺構としては、掘立柱建物と旧河道、井戸などが挙げられるが、平安時代初頭に農耕を行っていたという遺構は見つかっていない。ただし、古墳時代の鍛（第４次調査）や平安時代の馬厩（第１次調査）が旧河道から見つかっている。鍛は土木工事にも利用されるため耕作に使用されていたと断定はできないが、馬厩は確実に耕作に使用されるものであることから、洪水によって周辺から流されてきたもしくは河川祭祀の際に投棄された遺物と考えられる。いずれにしろ、わざわざ遠くから運んできたとは考えにくく、近隣に耕作地があったことは確実であろう。

b）近年まで葛下川では魚が釣れたと地元の証言がある。おそらく、この近辺で魚を釣ることができるような河道があったものと考えられる。

c）下田東遺跡では、この他にも馬に関わる遺物がある。古墳時代のものとしては、５世紀前半と考えられる鞍・後輪（しずわ）（第３次調査）や、下田東古墳周濠から５世紀後半の馬形埴輪と馬飼形人物埴輪（第１次調査）がある。馬は、古墳時代に乗馬の風習とともに大陸から伝わったと考えられており、当初は家畜としてではなく権力者の騎乗としての馬の利用が一般的であったとされる。したがって出土した馬形埴輪にも装飾的な馬具が表現されている。時代が下り、平安時代には耕作などに馬が一般的に用いられるようになるとされ、当遺跡でも馬歯が多く見つかるようになる。したがって、この地では木簡が書かれた９世紀初頭以前から馬に関係する遺物が出土している。さらに、補足として、古墳時代から平安時代にかけての製塩土器の出土量も一定量の出土がみられ、馬を飼育するための塩としても供給されていた可能性がある。



木簡釈文

（2）Ⅰ地区の調査

この調査区は事業地のほぼ中央、先述のH地区の東隣にあたる。新河川工事区域地の南北29m、東西44.8～66.2m、面積1,682.5㎡を調査対象とした。第４次調査のＦ・Ｇ地区が調査区の東に隣接する。H地区が９月に調査終了後11月７日より開始し、途中１ヵ月程度の中断を経て３月29日に調査を終了した。調査区は第１次調査の試掘トレンチ（14トレンチ）のほとんどを含んでおり、第１次調査では素掘溝と柱穴を多数検出したため、まずは上層の中近世素掘溝の面と考えられる遺構面（第１遺構面）で平面図作成及び写真撮影を行った後、下層の古代の遺構面（第２遺構面）を検出した。遺物は、先述のH地区と同様、第３次調査のＣ地区に連続した５mのグリッド枠を設定し、取り上げを行った。当調査区には東側に南北に縦断するコンクリートの現代水路や、それに接続する仮設水路（第１次調査後に設置）があり、それらを避けながらの調査となった。

遺構は素掘溝のほか掘立柱建物や井戸、ピット、土坑などが見つかっており、飛鳥時代から平安時代の時期を中心とする居住域が広がっていたと考えられる。次に、調査区西端に旧河道を検出し、調査を終了した。遺物はコンテナ約100箱分である。

〈基本層序〉

現地表面は調査区南端が標高53.4～53.1mで、北端では標高53.7mに及ぶが、H地区と同様に区画整理事業に伴う残土の積み上げや搬出が繰り返し行われたため、旧地表高は不明である。調査区のほぼ中央を東西方向に横断する現代水路跡の撹乱の深さは標高52.1～52.0mに達する。第１層は整地土層、第２層は近年の耕作土層である。ただし、第２層は調査区の西端に５cm程度残存するのみで、その他はすべて削平されている。第３層（褐灰色砂質土）は中近世の旧耕作土層で２層に分かれる。第４層（暗褐色砂質土）は遺物包含層、第５層が明黄褐色粘質土の基盤層になる。なお、調査区西半は河川の粗粒堆積物からなり、第５層は削られて青灰色シルト～粘土のベース層がみられる。

〈近代の遺構〉

上層の盛土を除去したところ、近世・近代の野井戸を３箇所確認した。うち、調査区中央のSE5425は隠し井戸であり、井戸の上に丸太や転用材、ブロックなどを利用して蓋をした状態でみつかった。近年まで使用されていたと考えられる。井戸の深さは５mを祐に超えていた。底には砂が溜まっており、水は湧いていないようであった。また、調査区東側の現代水路に接した状態でSE5430を検出した。これは桶を利用した水溜め遺構である。縦板を縄で縛る結い桶が底から30cm程度残っていた。直径１mの円形の桶の埋土からは大量の近代の桟瓦が出土した。この桶を除去したところ、下からは野井戸（SE5432）が見つかった。

〈平安時代後期～中近世の遺構〉

① 耕作溝（図18）

重機掘削によって検出した中近世の耕作面を第１遺構面とした。ただし、調査区東端の突出部東半は近代までの流路跡により撹乱を受けていた[1)]。検出した遺構は主にほぼ南北方向の素掘溝である。第２遺構面とした明黄褐色粘質土上からも、上層からの遺構と考えられる素掘溝が南北110条前後、東西12条ほど検出された。溝埋土からは土師器や須恵器、瓦器、陶器等とともに下層からの混入と考え

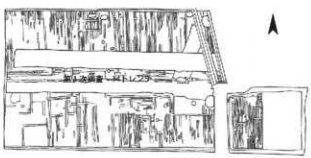


図18　Ⅰ地区　遺構平面図　上層（1/750）

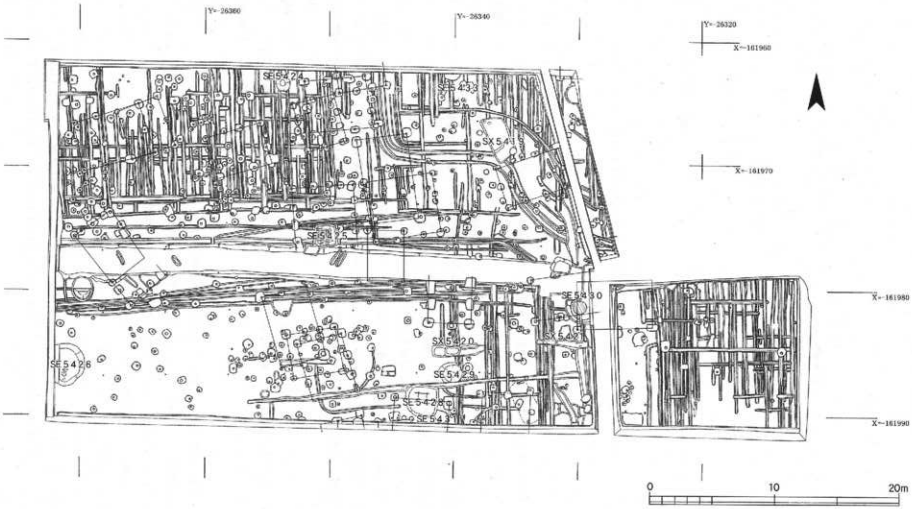


図19　Ⅰ地区　遺構平面図（1/300）

られるサヌカイトや埴輪片が出土している。H地区と同様に調査区中央を東西方向に走る素掘溝が検出され、坪境溝の可能性がある。

② 井戸

SE5426（図19） 調査区南西に位置する井戸で、H地区の調査では西端の0.8mを、I地区では2.0m分を検出している。井戸はH地区と合わせて東西2.8m、南北3.3mの平面が円形の上部土坑の下層から曲物が見つかった。曲物は積み重なった状態で検出した。部分的に入れ子状になっていたが、これは崩れ落ちたものと考えられる。1段目と2段目の曲物の周囲には15cm程度の礫が接して囲むように配置されており、石で曲物を固定していたと考えられる。曲物は樹種同定の結果ヒノキ科アスナロ属で、内部から見つかった曲物底板もまたヒノキ科アスナロ属であった。曲物は6点（図版16）出土した。1段目（188）が直径38cm、残存する高さが17cmで、内面に縦方向のケビキ痕がある。2段目（189）は現在の直径が40cmで残存高が12cmであるが、結合部分が外れており、本来の直径は40cmより小さい。内面には縦方向のケビキ痕がある。3段目（190）は直径40cm・残存高18cmで、内面に縦方向のケビキ痕がある。上部に使用されていた曲物の壊れた箍（たが）などと混在している。4段目は2個体が入れ子状になっており、外側に位置する曲物（192）は直径45cm・高さ24cmで、内面に縦方向のケビキ痕がある。箍は上部下部ともに残り、完形品である。内側の曲物（191）は直径38cm・残存高23cmの曲物で、内側のケビキ痕は斜格子に施されている。箍は下部のみ残っていた。5段目（193）の曲物は、直径36cm・高さ24cmの上下部ともに箍が残る完形品で、内面には縦方向のケビキ痕が見られる。

井戸からは土器（図25）や木片が多数出土した。また、1段目の曲物

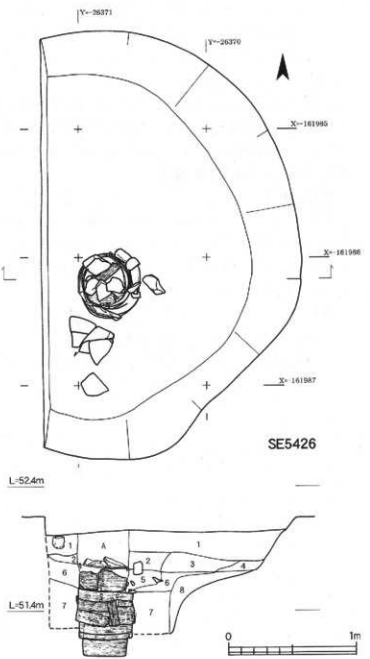


図20 SE5426 平面図・断面図（1/30）

内には廃棄時に礫が詰め込まれていた。井戸の上部土坑からは瓦器椀や黒色土器の破片のほか土師器の皿（108・109）や椀（110）が完形に近い形で見つかっている。108・109は10.5cm前後のいわゆる「て」字状口縁の皿である。110は口径が15.4cmで、外面下半に指頭圧痕と粘土接合痕を明瞭に残す。厚さは7㎜と分厚く、口縁は外反したのち端部をわずかに内反させる。出土遺物から廃絶は12世紀前半であると考えられる。

③ 土坑

調査区の東側では、長方形（SX5419）や溝状（SX5420・SX5421）の不定形の土坑が3基検出された。埋土は炭化物が充填しており、細かい土器片を含んでいた。遺構下底は凹凸が激しい。SX5419からは土師器や須恵器、黒色土器A・B類、瓦器、鉄滓などが出土している。「て」字状口縁の土師器皿片や大和型の瓦器椀の年代から12世紀前半のものと考えられる。SX5420からは「て」字状口縁の土師器皿片や黒色土器B類が出土しているが、小片のため時期は不明である。SX5420の東に位置するSX5421は、ほぼ完形で墨書「○」のある土師器杯のほか皿や須恵器の杯蓋などが出土し、出土遺物はおおよそ飛鳥～平安時代が中心になる。SX5420とSX5421は、遺構の形状や位置関係から同一遺構であったものが後世に削平されて2つに分かれた可能性がある。

〈飛鳥・奈良・平安時代前期の遺構〉

① 掘立柱建物

耕作溝の下から柱穴を確認した。柱穴は隅丸方形や円形の柱穴で構成され、柱穴の配置から掘立柱建物は10棟程度復元できる（図22）。建物の主軸は少なくとも4方向ある。ほぼ正方位を向くものや西傾するものがあり、西傾するもののなかでも主軸が異なることから、時期差を表す可能性がある。なかには1ｍの掘形をもつ柱穴も見つかっている。

② 井戸

SE5433（図21） 調査区中央の北端に位置し、井戸の北半は調査区外になるが、おそらく直径約1.3ｍの円形になると考えられる。中には直径40cm前後の平面円形の井戸枠（おそらく曲物）が3段分検

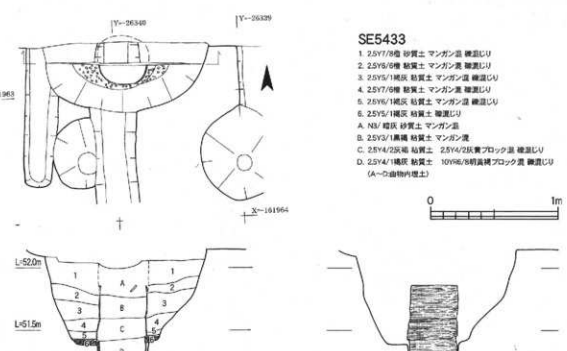
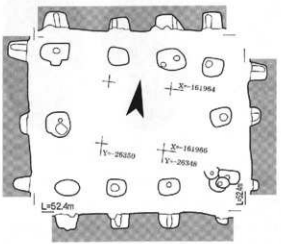
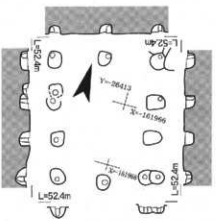


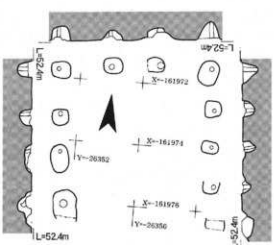
図21 Ⅰ地区 SE5433 平面図・断面図（1/30）



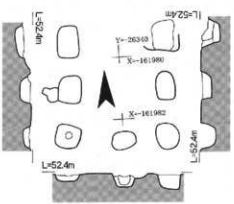
建物1



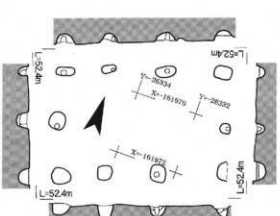
建物2



建物3



建物4



建物5

0 1 2m

図22　Ⅰ地区　掘立柱建物　平面図・断面図（1/40）

出されたが、自立できないほど腐朽が進んでいた。枠内埋土は4層にわかれ、最下底には2cm大の砂利が高さ2cm程度敷かれており、浄水機能を果たしていたと考えられる。また、掘形埋土にも1cm大の礫が混ぜ込まれていた。土層からは曲物を一段積んでは掘形に土を流し入れる構築法が観察された。遺物はわずかで、須恵器や土師器、黒色土器片などが出土した。土師器は屈曲の強い「て」字状口縁の小皿が出土した。また、枠内最下層からは黒色土器B類椀の破片が見つかった。土器の年代から11世紀頃の井戸であると考えられる。

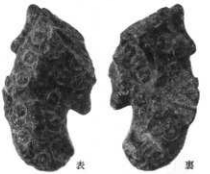


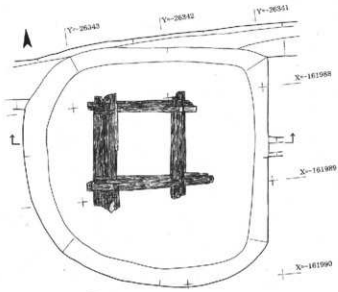
写真2　子持勾玉（SE5428出土）

SE5428（図23）　調査区中央の南に位置する井戸で、掘形は一辺2.5m程度の隅丸方形で、深さは検出面から約3.5mである。井戸枠は検出面から50cmほど掘り下げた地点で見つかった。枠板の両端部に切り込みをいれて組み合わせる相欠き仕口横板組と呼ばれる井戸で、下から12段分（約3m）が残っていた。枠板は横幅が1.2～1.3m、長さは20～45cm程度で、5～7cmの厚さの木材を使用していた（図版16-170～177）。枠板は樹種同定の結果ヒノキ科アスナロ属であることが分かった。香芝市内で見つかった井戸のなかでも最大級のものである。

枠内からは大量の遺物が出土した。その傾向として、第5～9層は一定量の遺物を含んでおり、第10a層はほとんど遺物が含まれない。第10b層より遺物の含まれる量が多くなり、第11a層から最下層である第12c層までは完形の遺物が多く出土した。合わせるとおよそコンテナ8箱分である。上層で出土した横瓶やはそうは古墳時代の遺物であり、井戸の埋め戻し時の混入である。

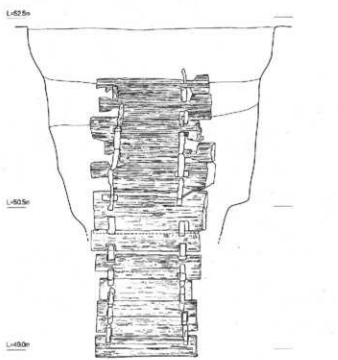
枠内の遺物（図27）は土師器の皿（94）や杯（95）、椀（96～99）、甕（100～102）、須恵器の小壺（103）や杯、甕破片などのほか、石や瓦、木製の杭や斎串などである。94は皿Aである。外面は口縁までケズリを施し、内面はヨコナデである。95の杯は外面下半の指頭圧痕が明瞭で、外面口縁部はヨコナデをする。底部外面には木の葉の葉脈痕が見られる。96・97の椀は94と同じく口縁までケズリを施し、内面にはススが付着する。96は体部に穿孔がある。98・99の椀は95と同じく外面下半の指頭圧痕が明瞭で、外面口縁部はヨコナデを施す。100～102はともに同じ作り方で、外面にハケを施し内面にユビオサエの後板ナデを行う。100は井戸の最下底から出土した土器で、ほとんど消えかけているが人面墨書土器である。101・102は内面口縁部にもヨコハケを施す。102は底部に穿孔を2箇所施す。103の底部外面は一方向のケズリで平らに整えた後、「サ」の字のようなヘラ記号を施す。斎串（図版16-178～187）は第11b層から第12層にかけて10本出土した[2]。穿孔のある土器や完形に近い土器が多く出土していること、斎串や人面墨書土器の出土などから、井戸の廃棄時に井泉祭祀を行ったことが考えられる。出土した土器の年代から、井戸の廃絶は8世紀末から9世紀初頭と考えられる。なお、掘形から古墳時代の子持勾玉（104・写真2）が出土した。上半部は欠損しているが、滑石製で全面に竹管紋を施す。

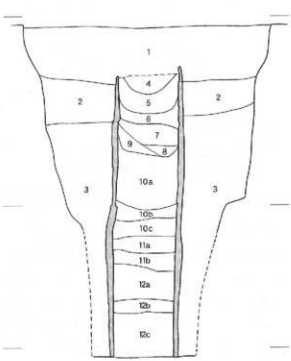
SE5429（図24）　調査区中央南端のSE5428の北東に位置する南北16.0m、東西18.5mの不整形の井戸で、断面形は擂鉢状である。埋土は5層に分かれ、井戸の深さは検出面から約1.0mである。中からはウメの実が出土した。土器（図27）は多くが中層で出土した。土師器の杯（105）は口径11.0cmで器高3.7cmである。外面下半に明瞭な指頭圧痕と粘土接合痕を残し、外面口縁部はヨコナデを施す。内面の口縁端部には沈線がめぐる。完形品である。土師器の甕（106）は外面に細かなタテハケを施し、内面は体部にユビオサエの後板ナデを行い、内面肩部には外面と同じ工具によるヨコハケを行う。底部に



SE5428

1. 10YR4/4褐色 砂質土 鉄分・マンガン斑 礫混じり
2. 10G5/1緑灰 砂質土 鉄分斑 粘土・礫混じり
3. 5B6/1青灰 粘質土 鉄分斑 礫混じり
4. 5YS/1灰 砂質土 鉄分斑
5. 5Y6/1灰 粘質土 鉄分斑
6. 5PB4/1暗青灰 粘土鉄分斑
7. 5PB4/1暗青灰
8. 5BG5/1緑灰 粘土
9. 5BG6/1緑灰 粘土
10a. 10GYS/1オリーブ灰 粘土
10b. 7aと同色
10c. 7aと同色
11a. 10BG5/1青灰 粘土
11b. 5PB4/1青灰 粘土
11c. 5B6/1青灰 粘土
12a. NS/ 粘土
12b. 9aと同色
12c. 8aと同色
（4～12層は井戸枠内埋土。なお11b層と12a～c層からは遺物出土）





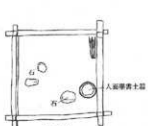


図23　Ⅰ地区　SE5428　平面図・断面図（1/40）

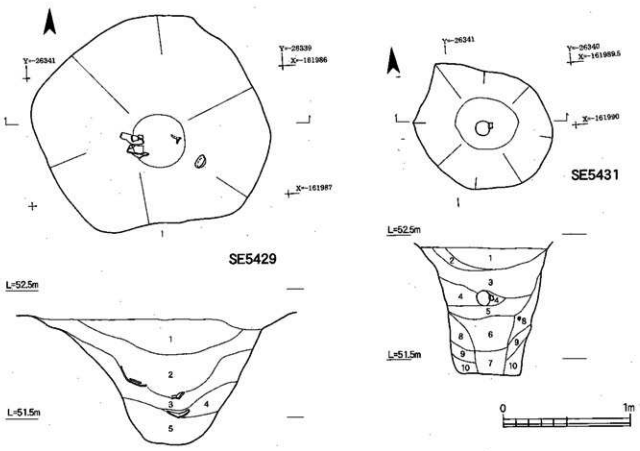


図24　I地区　SE5429. 5431　平面図・断面図（1/30）

穿孔があったことから、廃棄時の祭祀が考えられる。廃絶の時期は7世紀後半と考えられる。

SE5431（図24）　調査区中央の南端に位置し、北西隅をSE5428に切られている。大きさは南北1.0m、東西1.1mの楕円形の井戸で、深さは検出面から約1.0mである。埋土の観察から井筒を設けていた可能性が考えられ、さらに第8層から井筒の残骸の可能性のある木片が出土した。井戸からは土師器の丸底壺（図27-107）や須恵器の杯H蓋、製塩土器などが出土した。107は内面下半にヨコケズリを行うことによって器壁を薄くし、内面上半は左傾するナデ上げを行う。外面体部は板ナデを丁寧に行う。須恵器がTK217型式に相当することから、井戸は7世紀中頃までに廃絶したと考えられる。

〈古墳時代の遺構〉

SE5424（図24）　調査区中央の北端に位置する素掘りの井戸である。井戸は南北1.3m、東西1.0mの楕円形で、深さが検出面から約1.2mである。埋土は8層に分かれ、遺物は第6層にまとまって出土した。主に須恵器の杯身が多く、須恵器杯蓋や土師器甕が出土している。第1層下端では須恵器の杯蓋が完形で出土しており、また、馬歯も出土していることから、井戸の廃棄時に祭祀が行われたと考えられる。井戸の廃棄年代は、須恵器がMT85型式やTK43型式に相当することから6世紀中頃と考えられる。

SE5434（図25）　調査区中央の南端に位置し、おそらく方形になるであろう井戸の北端約30cm分を検出した。井戸の大半が調査区外であり、掘削面積は一部であるにも関わらず須恵器の杯H蓋・身や製塩土器などが玉ねぎ袋3袋分出土した。部分的な調査のため時期は決定できないが、古墳時代後期の土器片が多い。

〈古墳時代以前の遺構〉

調査区西端でH地区につながる旧河道（図26）を検出した。深いところで2m近くになる。埋土の上層にあたる灰白色粗砂層や黄白色粗砂層からは縄文土器が出土した。河道に削られたベース層は青灰色シルトであり、無遺物と確認した。

註

1）調査前、第4次調査F地区ではコンクリート製の水路があり、これが現在の調査区の中央に南北に走るコンクリート製の水路に折れ曲がってつながっていた。今回検出した流路遺構はそれを屈曲させずにまっすぐ南に延長したもので、コンクリート製の水路が作られる以前に水路として機能していたものと考えられる。ただし、埋土は無遺物の青灰色のシルトと粘土の水平堆積であり、人為的に埋め戻されたものではないため、コンクリート製の水路に作り換えた時にはほぼ埋没していたものと考えられる。この付近はちょうど条里の坪境に推定される部分に当たる。

2）畜串は、樹種同定の結果178～181・183・184・187がヒノキ科アスナロ属、186がヒノキ科ヒノキ属、その他ヒノキ科が182・185であった。長さは最大のもので21.5cm、最小のもので12.4cm、厚さは1.5～3cmである。大きさから4種に大別できる。178・179は第11b層、その他は第12層から土器とともに出土した。

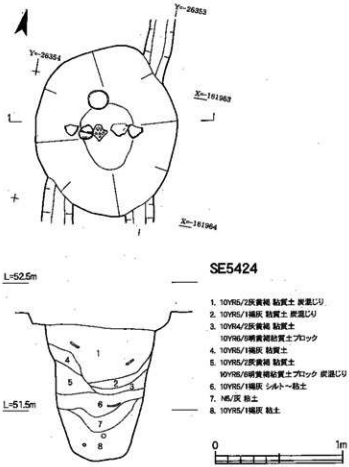


図25　Ⅰ地区　SE5424　平面図・断面図（1/30）

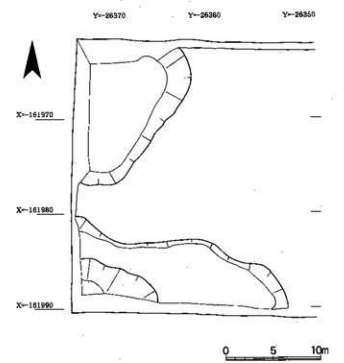


図26　Ⅰ地区　西端河道　平面図（1/400）

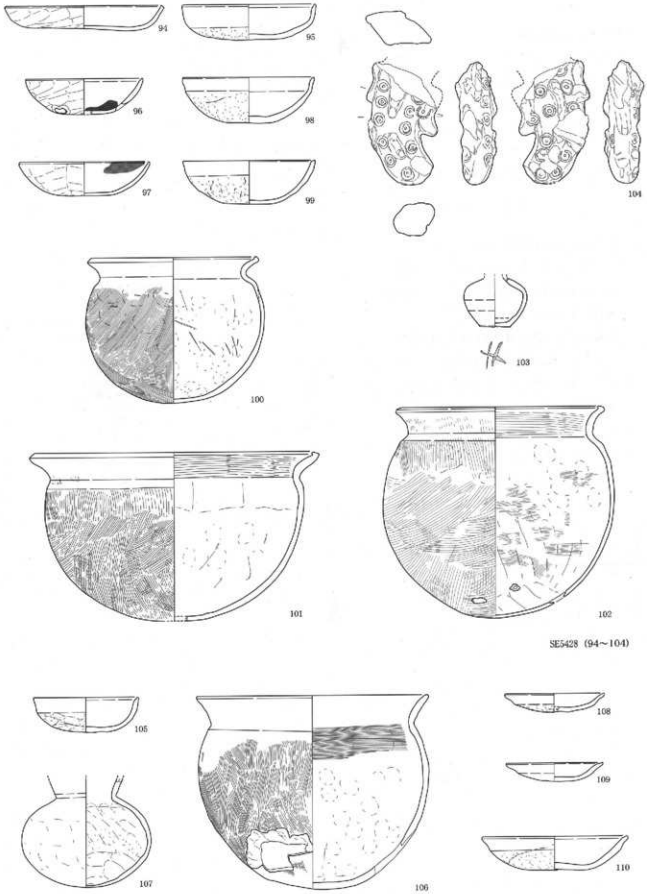


図27　Ⅰ地区　出土遺物実測図 (104以外すべて1/4，104は1/2)

(3) L地区の調査

1. 59トレンチ

調査地は山崎川南端部の東側、東西方向の街路敷設地にあたり、東西32m、南北6m、面積192㎡の東西に細長いトレンチを設定した。調査はまず中央よりやや西側にあったH地区でも検出した南北方向のコンクリートの現代水路を除去することから始めた。現地表面は標高52.6～52.8m前後で、表土（整地土・耕作土層）は厚さ20～50cmであった。その下層は素掘溝が見られる旧耕作土層で、数層にわたった堆積が見られた。まず、重機掘削により現代～近世の耕作土層を除去した面で第1遺構面（中世～近世）を検出した。次に、重機によって耕作土層の除去を試みたところ、東半で大きな遺物が多く出土したため、途中で掘削を止めて第2遺構面（古代～中世）を検出した。さらに、調査区の東側3分の1を人力で掘削し、第3遺構面を検出した。その後、調査区西端を河岸として縄文時代の旧河道を検出し、下層は青灰色粘土もしくはシルトの無遺物層であることを確認して、調査を終了した。なお、山崎川の旧流路が見つかることを想定していたが、南西隅に砂層による落ち込みを確認するにとどまった。遺構は素掘溝と土坑、ピット、溝、柱穴、旧河道などが検出され、主に古墳時代～飛鳥時代を中心とする。遺物はコンテナ8箱分で、土師器や須恵器などの土器片が占めている。

〈基本層序〉

第1層は整地土層、第2層は近年の耕作土層である。第3層は旧耕作土層（黄灰色・褐灰色）でさらに3層に分かれる。第4層は西端の地山を除き河川堆積である。河川堆積土層直上は、従前の調査において確認されている黒灰色粘土と周辺に暗赤褐色砂質土の広がりが確認できた。下層は粗粒堆積物である河川の洪水層になる。南西部は明黄褐色粘質土の地山となり、ここが河岸になる。地山は上から順に明黄褐色粘質土、灰白色シルト、灰色シルト～粘質土層に変化する。

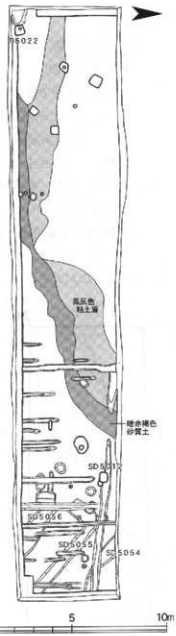


図28　L地区 59トレンチ
遺構平面図（1/200）

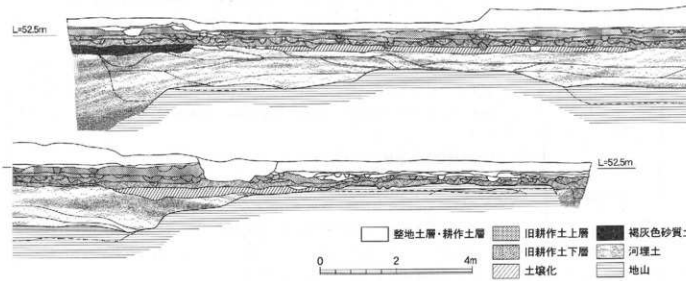


図29　L地区　59トレンチ　南壁断面図（1/100）

〈中近世の遺構〉

素掘溝（図30）

第1遺構面で幾重にも重なる中近世の素掘溝を検出した。ほぼ正方位をとる南北方向の溝であったが、重複がはげしい。第2遺構面も同様に、古代の素掘溝を正方位で確認した。第2遺構面の素掘溝からは、下層からの巻き込みと考えられる小型丸底壺など完形に近い遺物が出土した。なお、第3遺構面でも上層からの遺構と考えられる素掘溝が15条ほど見つかった。

〈飛鳥時代～平安時代の遺構〉

59トレンチでは、遺物の多くが小片のため不確実ではあるが、古墳時代のものが大半を占め、飛鳥時代に入る遺物はわずかである。平安時代の遺物は黒色土器1点のみになるため、この調査地周辺では奈良から平安時代にかけてほとんど土地利用が行われなかったと考えられる。

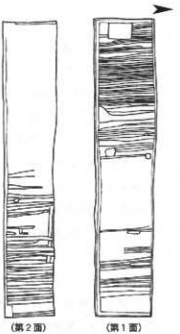


図30　59トレンチ　遺構平面図　上層（1/400）

① 柱穴

トレンチの東端と西端で柱穴を確認した。時代の詳細は不明であるが、直上に中世耕作層がのっていることから、古代の遺構面は削平されていると考えられる。なお、時期は不明だが南西隅の地山上に検出したP5022は隅丸方形のしっかりとした柱穴であり、調査地南へひろがる地山の安定した地盤上に居住域が広がっている可能性がある。

ii. 東西溝

SD5012　幅40cm、深さ約10cmで後述する60トレンチのSD5058につながる。飛鳥時代の遺物が出土している。

〈古墳時代の遺構〉

トレンチの東半では、河川堆積土層の上層に遺物を包含する褐灰色砂質土のベース層を確認し、第3遺構面とした。この面からは斜行溝やピット、土坑等を検出した。トレンチ西側は河川堆積土直上に広がる黒灰色粘土層と暗赤褐色砂質土が広がっており、この状況から河川埋没過程の最終段階に沼地になっていたと考えられる。この層内からは古墳時代の土師器の破片が少量見つかった。

i. 斜行溝

SD5054・SD5055・SD5056　幅60～90cm、深さ約10cmの斜行溝で、溝はおよそ45度近く西に傾く。溝の中では数ヵ所に小さな土器溜りがみられた。遺物は古墳時代の土師器の甕破片や須恵器の杯身小片、サヌカイト片などが出土した。

〈古墳時代以前の遺構〉

トレンチのほぼ全域を占める旧河道（図31）は砂やシルトの洪水堆積層で、中からは縄文土器片や石器、木の実、流木などが出土した。縄文土器はほとんどが後・晩期に属し、上層に位置する白色粗砂層や黄灰色粗砂層から出土した。木の実はオニグルミの核やシイ属・コナラ属・トチノキの種皮などが出土した。この旧河道は後述する60トレンチと同一である。

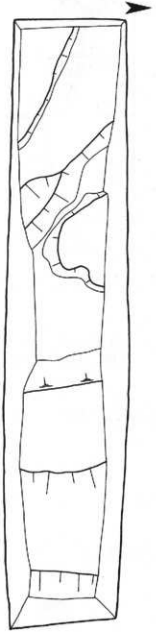


図31　59トレンチ　河道平面図（1/200）

2．60トレンチ

調査地は山崎川南端部の東側、東西方向の街路敷設地にあたり、59トレンチの東隣に東西27m、南北6m、面積162㎡の東西に細長いトレンチを設定した。重機掘削により現代～古代の耕作土層を除去した面で遺構検出を行った。次に遺構面のベース層である粗粒堆積物を掘削し、旧河道を検出した。河道の下層が青灰色粘土の無遺物層であることを確認し、調査を終了した。遺構は素掘溝や土坑、ピット、溝、落ち込み、旧河道などで、古墳時代～縄文時代を中心とする。遺物はコンテナ6箱分であるが、土師器や須恵器などの土器片のほか縄文土器がコンテナ2箱分、サヌカイトを中心とする石器が1箱分を占める。

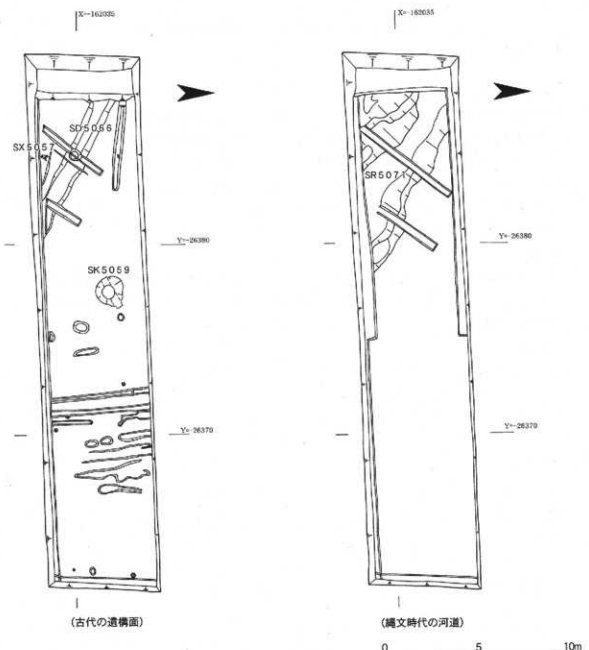


図28　L地区 60トレンチ　遺構平面図（1/200）

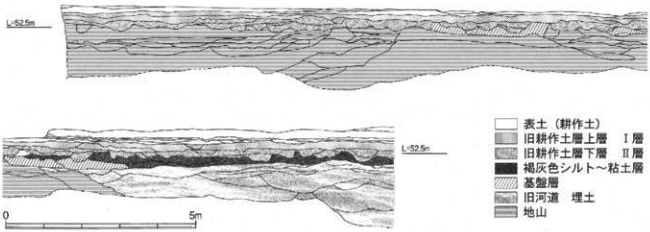


図33　L地区 60トレンチ　南壁断面図（1/100）

〈基本層序〉

現地表面は標高53.0m前後で、第1層は表土（耕作土）、第2層は素掘溝が見られる旧耕作土層で、薄い細砂層を挟みながら数層にわたって堆積している。第3層は調査地西側は59トレンチの東側から続く厚さ20cm前後の褐灰色シルト～粘土層が堆積した遺物包含層であり、この面を古墳時代のベース層と考え遺構面とした。トレンチ南西隅には遺物を含む上層の河川堆積を確認し、さらに下層にはトレンチ全面に広がる無遺物の河川の粗粒堆積層を確認して調査を終了した。

〈中・近世の遺構〉

耕作溝

トレンチ中央のやや高い地形をなす部分で、上層からの遺構である素掘溝が10条程度検出されてた。ほぼ南北方向であり、埋土からは本来あった包含層の遺物と考えられる土師器や須恵器細片が出土した。

〈飛鳥時代の遺構〉

① 東西溝

SD5058　幅40cm、深さ約10cm、埋土が黄灰色シルト～粘土の溝で、素掘溝とは異なる。59トレンチのSD5012につながる。埋土からは古墳時代から飛鳥時代の遺物が出土している。

② ピット群

トレンチ東側や中央に位置する直径20～30cmのピットで、深さは5～10cmと浅く、上面を耕作層に削平されたと考えられる。わずかに土師器や須恵器の細片が出土しているが詳細な時期は不明である。

〈古墳時代の遺構〉

① 土坑

SK5059（図35）　平面が不整円形で直径約80cm、深さ約60cmの土坑である。埋土からは古墳時代の土師器の長胴甕（図34-111）と高杯が出土した。

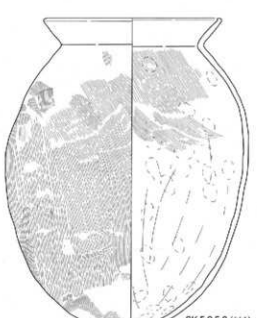


図34　60トレンチ　出土遺物実測図（1/4）

② 斜行溝

SX5057（図36） トレンチ南西隅に位置する落込み状の遺構である。深さ10cm前後で、埋土は褐灰色シルト～粘土である。古墳時代の丸底壺などの土師器片やサヌカイト片を多数含む。ここでは落ち込みとして検出したが、おそらく59トレンチの斜行溝SD5056に繋がる溝である。

SD5066 長さ8.0m、幅1.0m、深さ0.45mの北西から南東方向の斜行溝で、埋土はSX5057埋土と同じ褐灰色シルト～粘土である。遺物が細片のため詳細な時期は不明であるが、古墳時代の土師器の甕口縁や高杯、サヌカイトの剥片が出土した。

〈古墳時代以前の遺構〉

SR5071（図32） トレンチ西端、北西から南東にかけて走る旧河道で、長さ9.0m、幅4.0m分を検出し、深さは0.8mである。ベース層として最終段階に埋没した河道で、縄文土器片（図版17-230～243）や石器（図版17-194～229）が多数出土した。縄文土器はコンテナ２箱分、石器はコンテナ１箱分になる。縄文土器は後・晩期の遺物がほとんどであるが、前期の大歳山式や北白川下層３式、中期の鷹島式の破片も僅かに混ざる。なお、同じく河道からはオニグルミの核やシイ属・コナラ属・トチノキの種皮、トチノキの果皮、ブナ科の殻斗が出土した。

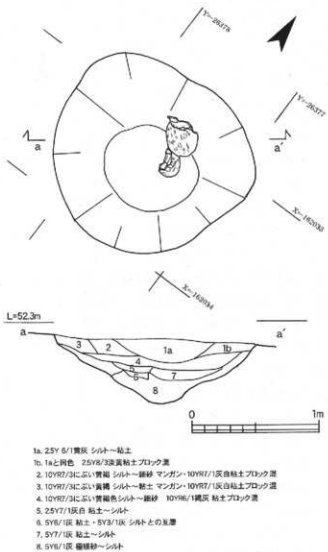


図35 60トレンチ SK5059 平面図・断面図（1/30）

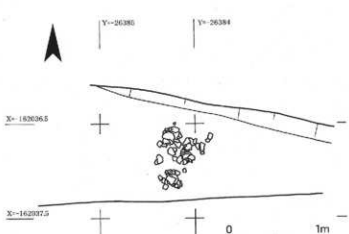


図36 60トレンチ SX5057 土器出土状況（1/40）

（4）J地区の調査

この調査区は事業地の北東、都市計画道路敷設地にあたるため、南北62.5m、東西16m、面積1,000㎡の南北に細長いトレンチを設定した。調査区は第１次調査の６・８・９トレンチ及び古墳拡張区に隣接もしくは一部重なる。調査は平成17年9月26日に開始し、平成18年1月24日に終了した。

現地表面は、度重なる区画整理事業に伴う土置き及びその搬出により、旧地表面より１m以上盛土がなされていたため、まず盛土をある程度除去した後調査を開始した。重機掘削により現代～近世の耕作土層を除去した面で第１遺構面（中世～近世）を検出した。この面では第１次調査の８・９トレンチを確認した。南側は区画整理事業前まで植林されていたという木の根により攪乱を受けていたためやや深く掘り下げたところ、第２遺構面とほぼ同一の遺構検出状況となった。次に、重機により第２遺構面（古代～中世）を検出した。さらに、第２遺構面上に部分的に残っていた包含層と沼状遺構埋土と旧河道埋土を人力掘削し、調査区の中央に地山（明黄褐色粘質土）を、南端と北端にはそれぞれ旧河道と沼状遺構を確認し、調査を終了した。

遺物の取り上げは、H・I地区同様、第３次調査のC地区で設定した５mのグリッド枠を引き続き利用して行った。遺構は素掘溝や方形土坑、ピット、斜行溝、柱穴、井戸、旧河道などが検出された。遺物はコンテナ約70箱分で、土師器や須恵器などの土器片や木材が大勢を占める。

〈基本層序〉

層位は上から順に第１層は整地土層、第２層は部分的に残る耕作土層、第３層は旧耕作層で、およそ３層に分かれる。第４層は部分的に残っていた包含層、第

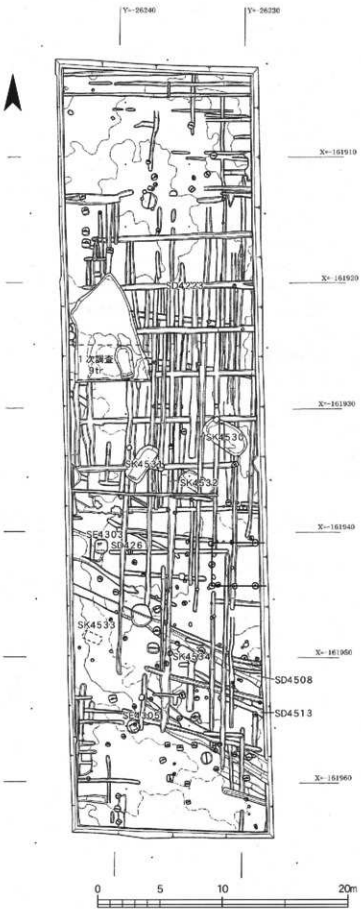


図37　J地区　遺構平面図（1/300）

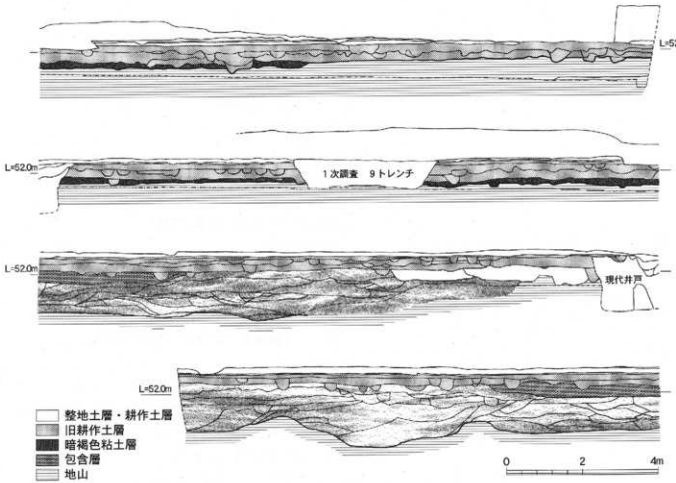


図38 J地区 西壁断面図 (1/100)

5層が地山である。なお、調査区北側の沼状遺構1の埋土は暗褐色粘質土、南側の沼状遺構2と南端河道は粗粒堆積物からなる。

〈中近世の遺構〉

耕作溝

第1遺構面で東西約90条、南北約30条の素掘溝を検出した（図39）。第2遺構面でも東西約30条、南北約15条確認したが、上層からの遺構も混じる。南北、東西ほぼ正方位である。調査区が南北方向に長いため20～30m以上の長さになる溝も多く、同じ溝でも南と北とでは埋土が異なる。特に、下層の包含層の影響から、埋土は北が粘質の暗褐色土、南が砂質の褐灰色土や灰褐色土を呈しているものが多い。遺物は土師器や須恵器が主で、黒色土器や瓦器などは僅かである。また、下層からの巻き込みが多く含まれる。東西素掘溝SD4223からは椀底部に穿孔を11孔施した土器が出土した。黒化処理は磨滅のため見られないが、器形や胎土などからおそらく黒色土器と考えられる。焼成の前後どちらに穿孔が行われたかも磨滅のため不明である。土器の年代は詳細には分からないが、平安時代と考えられる。なお、南北素掘溝SD4261からは完形の土師器の杯（図45－113）や底部に「西」と書かれた墨書土器椀（図45－114）が出土した。113は

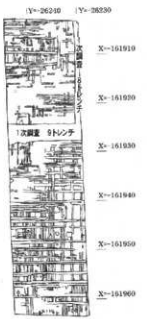


図39 J地区 遺構平面図 上層 (1/750)

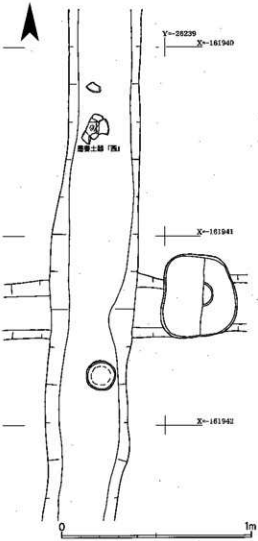


図40　J地区 SD4261
土師器杯・墨書土器出土状況（1/20）

口径14.6cm、器高3.6cmで、外面に指頭圧痕の後ヨコケズリを行う。外面の口縁はヨコナデを施す。114は口径14.6cm、器高3.9cmである。外面は軽くナデを行うが指頭圧痕が明瞭に残る。外面の口縁はヨコナデを施す。これらの土器の年代は奈良時代末から平安時代初頭頃と考えられ、人為的に土器を埋納した可能性があるため、素掘溝の中でも耕作溝と一概には決めかねる。現在検討中につき、今後の課題としたい。

〈飛鳥・奈良・平安時代前期の遺構〉

① 掘立柱建物

調査区中央東で1棟検出した（図37）。柱穴の大きさはおよそ一辺35～50cmの隅丸方形で、桁行3間以上、梁間2間の東西棟の建物である。掘形から出土した遺物から平安時代の建物と考えられる。

② 井戸

SE4303（図41）　調査区の中央西側に位置する南北約1.2m、東西約10.5mの隅丸方形の掘形をもつ井戸で、深さは検出面より約1m残存していた。中には井戸枠が残っており、一辺約70cmの方形で、板を各面に3～4枚並べた縦板組みで作られていた。井戸枠は樹種同定の結果スギの木であった。板の厚さは5cm前後で、外面は簡単な加工で済まし、内面は板状に平らに加工し、さらに桟木があたる部分には深さ2cm程度の方形の窪みを作って桟木を固定していた。井戸の底には桟木4本を方形にならべて井桁状に組み合わせ、さらに内部には井筒に転用された曲物（図版18-245）を設置していた。桟木はブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節、曲物はヒノキ科ヒノキ属[1]である。曲物の周囲に（第8層）には4cm以下の砂利混じりの土を敷き詰めており、曲物内の最下層にも3cm以下の砂利を敷き詰めて浄水装置としていた。曲物の中からは土器片のほか、ウリ（もしくはヒョウタン）やその他木屑などが見つかった。

曲物は上下の箍が残存する良好な状態で見つかった。大きさは直径42cm、高さ31cm、厚さ3mmで、箍の幅は上下とも6cmの平面円形の曲物で、内面には縦方向のケビキが行われ、上端にはさらに斜方向のケビキを加える。箍の下端には釘穴が穿たれており、井筒に転用前は底板があったと分かる。上端にも方形の釘穴が6ヵ所あけられており、側板と上部箍とを留める。側板の樺皮結合は2列6段程度、箍の結合は上下箍ともに1列3段である。枠内には20～30cm大の凝灰岩の切石片が上層で見られたほか、土師器や須恵器、黒色土器などが見つかった（図45）。115は土師器の皿である。口径15.2cm、器高1.7cm、外面は指頭圧痕の後ケズリを施し、外面口縁部をヨコナデする。内面はナデを施す。116は口径13.8cm、残存する器高3.4cmの土師器椀で、外面は指頭圧痕、外面の口縁部はヨコナデを施す。内面はナデを施す。117は黒色土器A類椀で、高台は粘土を貼り付けて成形する。内外面は磨滅しておりミガキは残っていない。外面は指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデを施す。出土した土器の年代から平安時

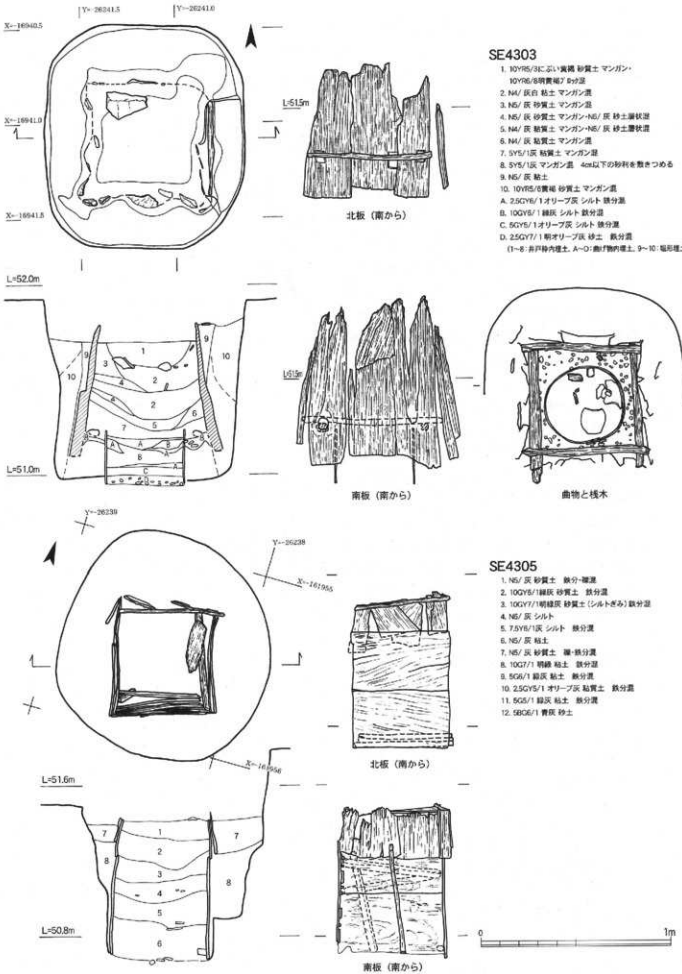


図41　J地区 SE4303, 4305 平面図・断面図・立面図（1/20）

代初頭に廃絶した井戸と考えられる。

SE4305（図41）　調査区の南西に位置し、大きさが南北1.2m、東西1.1m、深さ1.1mの不整円形の掘形の中に、底から80cmの部分まで井戸枠が残っていた。井戸枠は一辺約55cmの方形で、厚さ２cm前後に丁寧に加工されたヒノキ科アスナロ属の板を使用していた。井戸枠の四隅に隅柱はなく、ほぞ穴を作って組み合わせていた。井戸枠の上部20cm程度は、残存する部分が少ないので確実には分からないが、おそらく縦板組みに変化している。また、その材もクスノキ科クスノキ属クスノキに変化していることから、井戸枠は一度作り直された可能性も考えられる。遺物（図45）は枠内の第３層から完形の土師器の皿（118）が、最下底から土師器の甕（119）が見つかった。118は口径16.4cm、器高2.9cmで、外面体部に幅の狭いケズリを密に施し口縁にまで及ぶ。底部は一方向のケズリの後墨を一箇所に塗ってある。底部には穿孔が１箇所見られるが、墨書の一部を欠損させていることから、墨書を施した後穿孔を行ったとわかる。119は外面にやや荒いハケメを不定方向に施す。内面はナデを施し、口縁部は外面と同じ工具によるヨコハケを施す。内外面とも全体にススが付着している。出土した土器の年代から奈良時代末から平安時代初頭に廃絶した井戸であると考えられる。穿孔のある土器が中層付近で見つかったことから、井戸廃棄時に祭祀が行われたと考えられる。

③　旧河道

南端河道（図42）　調査区の南端では、第４次調査のＣ・Ｆ地区の旧河道3000に繋がる旧河道を確認した。河道の屈曲部外周に位置しており、北東が深く抉られている。2.5m以上掘り下げた最下底からも洪水によって流されてきたと考えられる流木や土師器、須恵器、瓦、塼、馬の骨などが多数出土した。埋土は灰白色や灰色、黄色の粗砂・細砂・粘土・シルトなどによる洪水堆積である。土器は完形に近いものが目立ち、さらに底部に穿孔を施した土器や馬骨の出土等から、祭祀に使用されたと考えられる遺物が含まれる。

抉られた北東部の岸付近では杭列が見つかった（図43）。杭列は直径10cm程度の丸太材の先端を尖らせて加工したものを打ち込んだ３本の直立杭と、直径12cm程度の丸太材の先端を同じく尖らせて加工したものをほぼ水平方向に３～５本打ち込んだ杭で構成されていた。河杭の材質はブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節やブナ科コナラ属アカガシ亜属、マツ科マツ属等を使用していた。水平

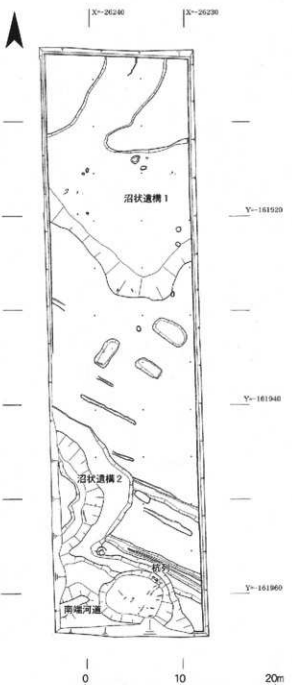


図42　Ｊ地区　下層　河道面　平面図（1/400）

方向の杭を検出するために地山を掘削したところ、残存する杭の長さは最大2.5mであることを確認した。直立杭の上部には細い枝が絡まって見つかっているが、これは人為的なものなのかは判断がつかなかった。護岸施設の一部であった可能性が考えられる。

旧河道内から出土した遺物（図45－122・123、図46－124～141）を説明する。122は残存する長さ23.3cm、幅15.0cm、厚み4.7cmの長方形の塼である。片面は丁寧なヘラケズリを施し、もう片面はヘラナデを行う。一部黒斑が見られる。123は格子叩き平瓦である。広端部の一部が残っている。残存長が15.5cm、残

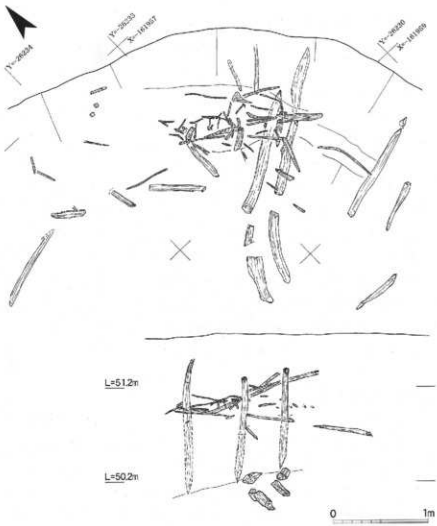


図43　J地区　河道内杭列　平面図・立面図（1/40）

存幅が15.7cmで、厚みが1.8cmである。叩き目は明瞭で、側面に面取りを施す。凹面は細かい布目を残し未調整である。124～131は須恵器である。124～126は杯H身で、124は口径13.5cm、受け部径16.2cmである。内傾する口縁部と体部の形態からTK209型式に相当するものと考えられる。125は口径15.8cm、器高4.3cmで、直線的に上外方に立ち上がる口縁とやや外側に踏ん張った高台をもつ。内外面ともナデ調整である。127は短頸壺だが体部最大径の屈曲は明瞭でなく、ヘラケズリも底部のみに省略されている。124とほぼ同時期の可能性が高い。128は広口壺で外面の体部に一部平行叩きが残る。129は台付壺で外面体部に櫛歯状工具による刺突が巡る。台部には3方向の透かしの痕跡がある。130は甕で内面の同心円紋の当て具痕が明瞭で、外面は平行叩きの後カキ目調整を施す。131は長頸壺である。内外面ともヨコナデで、底部高台は外に張り出す。口縁は外湾が激しく、端部は上方につまみあげる。132～141は土師器である。132は口径12.7cmで、内面に放射状暗文を施し外面は口縁部を2段にヨコナデを施す。133は口径が15.8cmで、内面体部に放射状暗文、内面見込み部にラセン状暗文を施す。外面の口縁部は広くヨコナデを施す。134は133と同様の調整だが、口径が17.4cmである。135は椀である。ただし、椀といっても作り方は甕の下半部と同じ作り方、つまり外面がハケ目調整で内面が指頭圧痕の後横方向の板ナデを行う。136は把手付鍋である。底部は焼成後打ち欠いてある。137は口径10.2cmの小壺である。外面は磨滅のため調整が不明であるが、内面はヨコケズリを行う。138～140は甕、141は長胴甕である。138は内面を斜め上方向にナデ上げ、外面は主に縦ハケを施す。口縁部はあ

まり屈曲せず、内面の口縁端部は直線的である。139と140は内面板ナデ、外面は縦方向のハケの後下半部に不定方向のハケを行い、内面口縁にも外面のハケと同じ工具によるヨコハケを施す。139よりも140の口縁部の屈曲が激しく、口縁端部も上方にツマミ上げる。140は1.5cm大の穿孔を施す。141は内面不定方向のハケ調整を行い、外面はタテハケを施した後下半部にヨコハケを施す。口縁の屈曲が激しく、体部径よりも口縁径が大きい。出土遺物は古墳時代後期の遺物も一部存在しているが、主に飛鳥時代と平安時代前期の遺物で占められていることから、埋没時期は平安時代前期と考えられる。なお、ムクロジの種子が1点出土した。

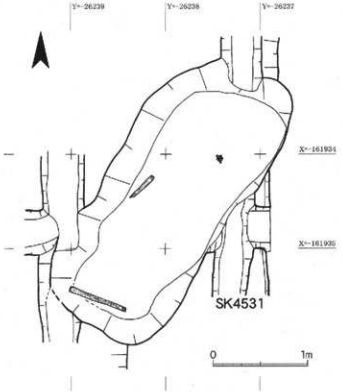


図44　J地区 SK4531 木製品出土状況（1/40）

〈古墳時代の遺構〉

① 斜行溝

ほぼ正方位を向く素掘溝の下から、斜行溝を数条検出した（図37）。埋土は地山とほぼ同色の黄褐色砂質土と暗灰黄色粘質土であるが、河川堆積土ではその色調や質を変える。SD4508の幅は約1.5m、長さ約16.5m、深さ25cmで、SD4513の幅は約30cm、長さ4m以上、深さ約5cmである。後世の耕作等により遺構面はかなり削平されており、本来は調査区全体に斜行溝が広がっていた可能性がある。角度を変えながら重複を繰り返していることから数度の掘削が考えられるが、前後関係は不明である。時期の確定は難しいが、SD4508からは須恵器のはそう（図45－121）や杯H蓋（図45－120）が出土しており、古墳時代である可能性が高い。また、L地区59・60トレンチで検出した古墳時代の斜行溝ともほぼ方位が一致する。

② 方形土坑

調査区内に5基（SK4530～SK4534）見つかった（図37）。いずれも斜行溝の方向と平行または直交する。深さは約40～45cmで、大きさは長辺が約3～4m、短辺が約1～2mである。埋土は上から順に明黄褐色砂質土と灰白色粘質土、黄色粘質土である。遺物は土師器片と須恵器片が少量出土しているが、時期は特定できない。なお、SK4531（図44）からは3ヵ所木片が出土しているが、南端から出土した木片は棒状に丁寧に加工が施されていた（図版18-244）。樹種同定の結果棒状製品はマツ科マツ属である。これらの遺構は土壙墓の可能性がある。

③ 沼状遺構（図42）

沼状遺構1　調査区北側では暗灰黄色粘質土～粘土層の拡がりを確認した。水の流れはほとんど見られず沼地であったと考えられる。下層の人間が住む以前に流れていたと考えられる旧河道の最上層にあたる。層の厚さは25cm程度である。沼底の基盤層（青灰色～灰色粘土）上には葦などの植物が生育していたと思われる無数の植物の株痕（約1～3cm大の黒灰色粘土の斑点）が一面に見られ、また所々その植物遺体が検出された。遺構は東西14m以上、南北15mであり、さらに調査区北東からは無数の人の足跡が見つかった（図版10-2）。古墳時代の土師器小片が出土したことから、古墳時代の遺構と考えられる。

沼状遺構2　調査区南端に位置する河道の北西に位置しており、西側は調査区外のため規模は不明であるが南北12m、東西5m分検出した。深さは約1mである。北側の沼状遺構1が河川の最上層の窪地にできたもので埋土も粘質土や粘土であったのに対し、この遺構は南端河道と一体であり、雨が降った後などに当屈曲部に急流が起こり、砂と一緒に水がこの部分にオーバーフローして定期的な湿地になっていたものと推測でき、埋土は砂質土や砂土を基本とする。埋土を除去すると青灰色粘土の地山が広がっており、沼底からは牛のひづめ跡（正しくは、ひづめ跡の窪みに灰白色の粗砂が詰まった状態）（図版10-4）が確認された。また、近接する南西隅の高まりからは人の足跡が見つかった。このことから牛を飼育していた可能性が高い。遺物は小片であり時期を特定するだけの材料はない。ただし、方形土坑SK4533や斜行溝の下層にあたるため、古墳時代には形成されていたと考えられる。

註

1）クヌギ節にはクヌギとアベマキが、ヒノキ属にはヒノキとサワラがある。

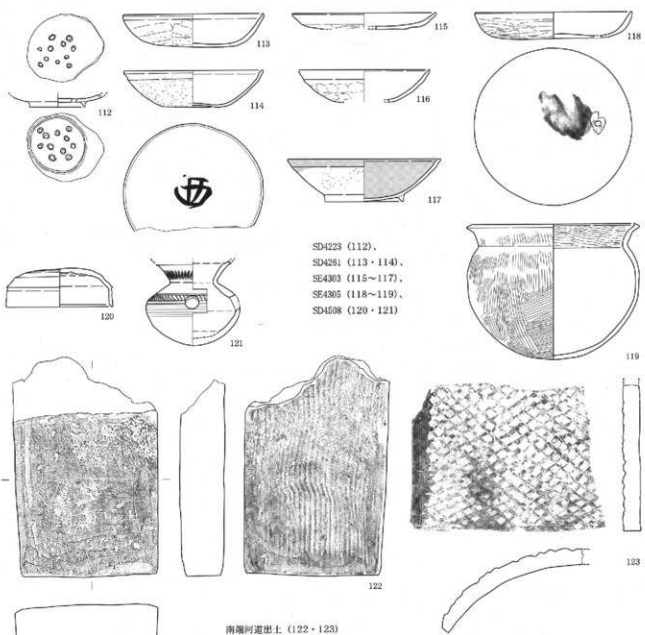


図45　J地区　遺物実測図（1）（すべて1/4）

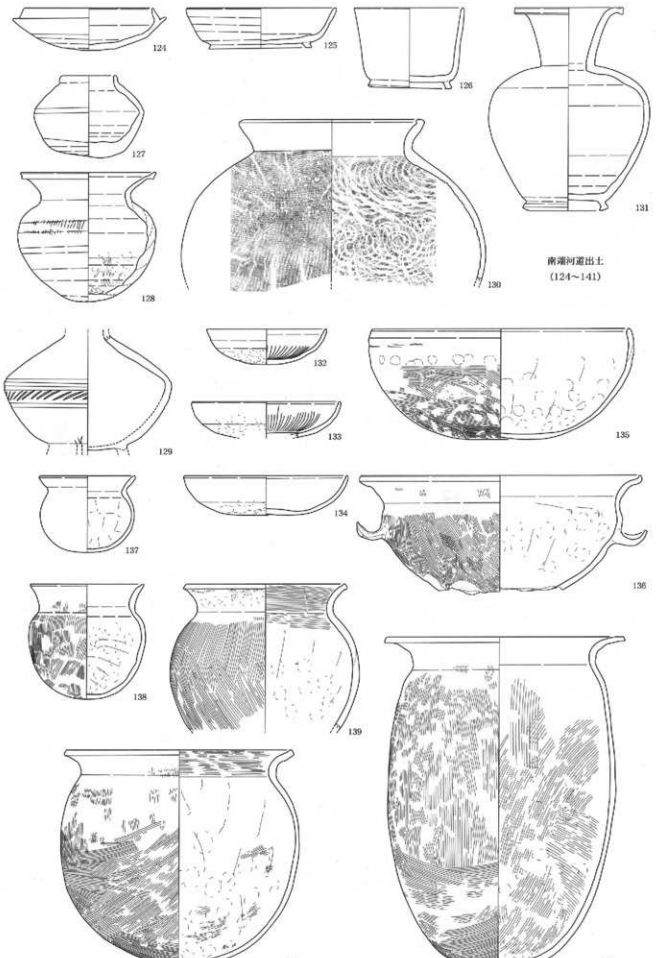


図46　J地区　遺物実測図（2）(すべて1/4)

（4）K地区の調査

事業地の南東に位置する都市計画道路敷設地にあたり、南北20m、東西16.8m、面積336㎡を調査対象とした。第３次調査のＤ地区40・43・53トレンチに近いことから、古墳時代から平安時代の建物群を検出する可能性を考えて調査を行った。調査は平成18年1月16日に開始し、3月8日に終了した。

写真３　有孔円盤（素掘溝出土）

事業地の東南部分は、区画整理事業以前は一部植林されていたがほとんどが土地利用されず荒地になっていた。当調査地も長い間土地利用されることがなかったため、旧耕作地の現地形をそのまま残すものと考えられる。まず、重機によって４～５回にわたって掘削される素掘溝層の最下層を検出（第１遺構面）して調査区全面が耕作地であると確認した。次に、重機によってこれを除去して第２遺構面を検出した。遺構は計35個で、ピットや土坑、落込みなどが見つかった。さらに、下層から旧河道を検出した。河道に削られたベース層は青灰色粘土からなる無遺物層と確認し、調査を終了した。

遺物は、５ｍグリッド枠を設定して取り上げた。遺物はコンテナ約30箱で、土師器や須恵器、陶器、磁器の他、埴輪や砥石などが見られる。

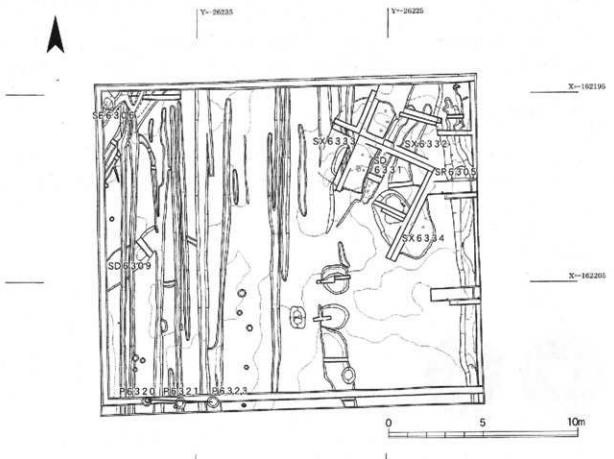


図47　K地区　遺構平面図（1/200）

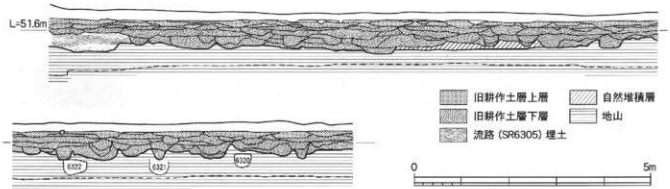


図48　K地区　南壁断面図（1/80）

〈基本層序〉

原地盤の高さは標高52.0～51.9mである。第１層は耕作土層である。第２層は旧耕作土層で、素掘溝が明瞭に残る。第２層はさらに４～５層に細分できる。第３層は黄褐色シルト～粗粒堆積物からなる人為的な攪拌を受けない自然堆積層（基盤層）である。この面で古代の遺構が検出される。さらにこの面では流路と旧河道が検出された。

〈中・近世の遺構〉

耕作溝

ほぼ南北方向の重なり合う素掘溝を検出した（図49）。溝の中からは土師器や須恵器、黒色土器の他、瓦器や陶器、磁器、埴輪が多く出土した。特に下層からの巻き込みと考えられる古墳時代の土師器や須恵器、埴輪が大半を占めており、耕作によって本来あった遺構面を削平したと考えられる。また、古墳時代の有孔円盤（写真３）が出土した。

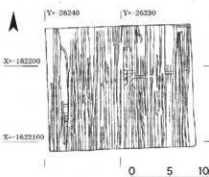


図49　K地区　遺構平面図　上層（1/500）

〈平安時代の遺構〉

① 柱穴

調査区の南西の南壁付近に一辺50cm、深さ30cmの隅丸方形の柱穴が３基（P6320・6321・6322）見つかった。1.3mの間隔で並んでおり、掘立柱建物の可能性が高い。遺物は「て」字状口縁の小皿や羽釜など平安時代中頃のものが出土している。なお、その他に検出されたピット（小穴）も、出土遺物からほとんどが平安時代に属すると考えられる。

② 流路

SR6305　調査区東側、南北方向に延びる幅約1.5m、深さ約40cmの流路である。埋土はラミナのみえる粗粒堆積物である。出土遺物は土師器の「て」字状口縁の小皿や羽釜、黒色土器などがみられる。また、最下底から径1.9～2.0cm、方孔一辺0.6cmの銅銭（図53-148、写真５）が出土した。銅銭は表裏両面に緑青が付着しているため、文字があるかは分からない。

写真４　銅銭（SR6305出土）

〈古墳時代の遺構〉

① 落ち込み

SX6331・SX6332・SX6333・SX6334（図50）　SX6331は長さ約5.7m、幅55～85cm、深さ約10cm前後の溝状遺構で古墳時代中

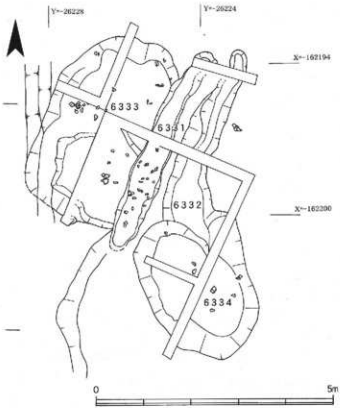


図50　SX6331. 6332. 6333. 6334 平面図（1/100）

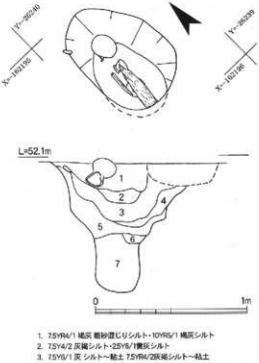


図51　K地区　SE6306（1/25）

期～後期の土師器や須恵器片を多く含む。底面は踏み込み状の凹凸がみられる。SX6332はSX6331と平行に走る溝状遺構であるが前者と比べて浅く、遺物が少ない。それらを挟んで方形の土坑状遺構が2基（SX6333・SX6334）検出された。北側のSX6333は隅丸方形で規模は南北約5.0m、東西約2.8m、深さ約10cmである。SX6331と同様に土器片や馬歯細片を含む。南側のSX6334は南北約2.8m、東西約3.9m、深さ約10cmである。竪穴住居などの遺構の可能性を考え精査したが柱穴などは見当たらなかった。埋土に土器細片が多く含まれることから土器廃棄場所と考えられる。

遺物（図53）は、SX6331から須恵器の杯H蓋（145）が、SX6334から須恵器の高杯杯部（146）や杯H身（147）などが出土した。147は底部にヘラ記号を施す。この他にもたくさんの土器片が出土しているが、おおよそ古墳時代中期～後期にあたる。

SD6309　調査区西側に斜方向に走る溝である。幅約1.4mで検出した長さは約3mである。溝の中からは古墳時代の土師器の高杯や須恵器の杯H蓋（図53-144）などが出土した。L地区で検出した斜行溝と同じ性格の可能性が考えられる。

② 井戸

SE6306（図51）　調査区北西隅に位置し、長辺80cm、短辺55cm、深さ90cmの楕円形の掘形をもつ井戸で、埋土は上層がシルト、下層が暗青灰色粘土である。井戸の底からは2本の木が交差した状態が検出された。木はいずれも加工した切断面をもち、一方は先端を杭状に尖らせていた。出土遺物（図53）は、最上層から土師器の二重口縁壺（143）が、最下層から土師器の壺（142）が出土した。142は体部に内外面とも斜め方向のナデを施し、外面口縁部には放射状の暗文を丁寧に施す。内面底部には工具による板ナデの静止痕がみられる。143は142と同じく体部に内外面とも斜め方向のナデを施し、口縁端部は内側に折り曲げる。底部に1ヵ所打ち欠いた孔がみられる。

〈古墳時代以前の遺構〉

SR6335（図52）　調査区の北西に東西方向に延びており、長さ13.8m分を検出した。幅は2.3～5.3m、深さ1.4mである。埋土である粗粒堆積物上層からは縄文時代前期の大歳山式の土器片（図版19-261～269）や多角形底の破片（図版19-270・271）が出土した。多角形底は第４次調査でも１点出土しており、下田東遺跡で３点出土したことになる。さらに、周辺の遺跡では狐井遺跡でも出土している。

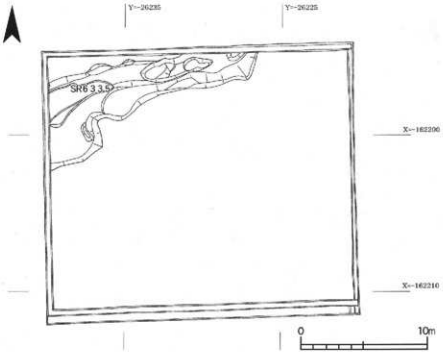


図52　K地区　河道　平面図（1/300）

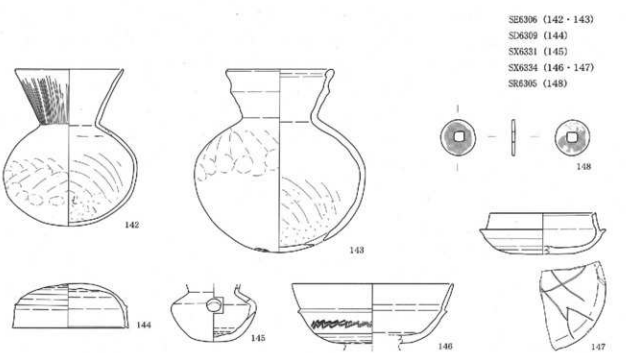


図53　K地区　出土遺物実測図（148以外すべて1/4、148は1/2）

5．まとめ

第５次調査では、これまでの調査に引き続いて縄文時代の土器やサヌカイト製の石器が見つかった。前年度までの調査結果と同様に旧河道や流路からの出土であり、当該期の遺構は未だ発見されておらず、やはり上流から流されてきたものと考えられる。付近に位置する瓦口森田遺跡や狐井遺跡がその候補に挙げられよう。また、出土傾向としても前年度までの調査結果と同様、前期後葉、中期末～後期後葉、晩期末に出土数のピークがあることが確認できた。

古墳時代にはいると土坑や井戸、溝などが検出されている。しかし、未だ沼地であった部分も多いことが今回の調査で明らかになった。当遺跡では、葛下川の旧河道が蛇行し沼地が点在していた中、洪水によって堆積した土地や沼地が土壌化した部分を利用して人々が居住を始めたと考えられる。遺構はＬ地区やＪ地区、Ｋ地区に多く見られたが、Ｈ地区やＩ地区が古墳時代に土地利用がされていなかったのではなく、後世の土地利用によって削平された可能性が高い。

なお、Ｋ地区では遺構に伴わないものの埴輪片がコンテナ５箱分出土した。円筒埴輪だけでなく人物埴輪の腕部やその他形象埴輪の破片も見られる。逆に、第１次調査で見つかった下田東古墳に近いＪ地区では、ほとんど埴輪片は見つからなかった。このことから、Ｋ地区近辺に下田東古墳ではないさらにもう一基の埴輪が伴う古墳が眠っている可能性が考えられる。

Ｊ地区の南端では、第１次調査や第４次調査（旧河道3000）で検出した飛鳥時代から平安時代前期にかけての旧河道の一部が見つかった。この河道では以前の調査で人面墨書土器や斎串、底部に穿孔のある土器が出土するなど、律令的河川祭祀が行われたと考えられる遺物が出土している。Ｊ地区でも同様に祭祀遺物と考えられる穿孔のある土器などが見つかり、これらの遺物の出土状況からは、この地でケガレや悪霊などを流し去るために行う“祓え”が行われていたことが確認できた。

Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ地区では古墳時代から平安時代後期にかけて多くの井戸が見つかった。これらのうちほとんどの井戸では清浄な水を得るための井泉祭祀が行われたと考えられる遺物が見つかった。井戸の祭祀は古墳時代から存在するが確立されたのは律令期とされ、その律令的祭祀遺物としては斎串や土馬、貨幣などが知られる。木簡が出土したＨ地区の井戸（SE4095）や香芝市内でも最大級の大きさであるＩ地区の井戸（SE5428）は平安時代初期の井戸であり、斎串やそれに共伴する形で完形や穿孔のある土器が出土している。また、SE5428の最下層からは人面墨書土器も出土している。Ｈ地区で見つかった古墳時代の刳貫き井戸（SE4143）からは竪櫛や有孔円盤が出土し、定型化する律令的祭祀以前からこの遺跡において様々な祭祀が行われていたことを示している調査となった。

第５次調査でもこれまでの調査と同様に多くの墨書土器が見つかった。すでに出土している石帯や円面硯などの遺物や、後述する木簡の出土などからも、当遺跡は識字者層の居住域であり、官衙的性格が考えられる。これまで、葛下郡衙は字「コオリ」が残る大和高田市材木町や葛城市新在家などが候補として考えられているが調査による確認例はない。今回出土した律令的祭祀遺物などは各所で出土するものではないため、当該地区に葛下郡衙が存在する可能性がより高まったと考えられる。

Ｈ・Ｉ地区では飛鳥時代から平安時代前期の大型掘立柱建物群が見つかった。遺跡の中でも比較的大きな掘形をもつ柱穴や大型建物が見つかっており、隣接する第２次調査の中央北・南区や第４次調査のＦ地区でも大型掘立柱建物群が見つかっていること、Ｈ地区の井戸（SE4095）からは木簡が出土し公的な施設が近くに考えられること、さらに、Ｈ・Ｉ地区の地山面は事業地内でも安定しており、そういった地盤の安定した地に中心的な建物が建てられることが多いことなどから、Ｈ・Ｉ地区の位置する事業地の中央部に律令期の下田東遺跡の中心的な部分があったものと考えられる。したがって、当遺跡の性格を理解するための重要な調査であったと考えられ、今後さらに建物の復元やその時期を明らかにするための整理を

行っていく必要がある。

当遺跡の所在する市の南東部は、奈良盆地を象徴する条里制遺構の顕著な依存状況が知られており、昭和22年や36年撮影の航空写真からもその状況が明確であったため（図版20）、今回の調査でも基本的に、古代の遺構面を検出する前に中近世の耕作面を検出することにした。その結果、平安時代後期から中近世にかけての素掘溝が検出され、整然とほぼ地割に沿った良好な依存状況が確認できた。さらに、H・I地区では条里の坪境と考えられる痕跡を確認した。奈良県内では、大和郡山市の池尻遺跡で3層にわたって水田面が検出されており、最も下層の水田の造成時期は8世紀末に遡ることが確認されている。また、広陵町の橋尾遺跡の条理地割の下層にみられる諸々の遺構が12世紀のものであることから、条里畦畔が部分的にあるにしろ中世に施工されたものであるとする見解が出されている。今後の調査によって当遺跡における条里の施工時期を明確にすることが必要であると考える。

第3次調査のC地区では環濠居館の一部が検出され、環濠からは14世紀後半から15世紀前半の遺物が見つかっている。環濠居館の機能していた室町時代前半、葛下郡全域に平田庄という大荘園が展開しており、香芝市内には下田氏、岡氏、万歳氏などの武士が居住していたと考えられている。今年度の調査では、この時期の遺物がK地区に集中しており、H・I・J・L地区では当該期の遺物はほとんど出土しなかった。K地区は環濠居館に伴う遺構が発見されたC地区の南西に位置することから、その時期の生活域がC地区を含んだ南方に位置していたと考えられる。代わりに、C地区の北側及び西側は当該期の遺物の包含がほとんど見られなかったことから、耕作地として土地利用されていたと考えられる。なお、K地区は事業地で最も東南に位置する調査であり、平成17年度に初めて調査した地域になる。K地区では、遺構に伴わないが他地区に比べて鉄滓や砥石が多く出土した。これらの遺物からはK地区周辺には鉄鍛冶を行った遺構が見つかる可能性が高く、のちにこの地で展開する下田鋳物師との関連も想定される[1)]。

〈木簡出土の意義〉

H地区の井戸（SE4095）から出土した木簡は、曲物の底板を利用して表裏両面に墨書が施されていた。木簡には大きく分けて5つの内容が記載されている。すなわち、a面（横長）に①「小支石」による「田苅」の勤務日程、②「年魚（＝あゆ）」の売却記録、b面（縦長）に③「和世（＝早稲）種」、「小須流女」（品種名）の種蒔き時期[2)]、④習書「隘傴嗑……」、⑤「伊福部連豊足解」の下書き、である。なお、木簡の観察から最後に書かれた文章は⑤の「伊福部連豊足」の解文の下書きであると考えられる。また、転用材に書かれた木簡という点や内容から考えて、移動せずに同一場所で短期間（1～2年程度）に記載が行われたと考えられている（香芝市教委2005）。これらのことから公的組織に関係した人物が記載したと考えられ、下田東遺跡の性格として公的施設の出先機関や平安初期の庄園、郷長家などが候補に上がる。木簡は遺跡の性格を知る重要な手がかりであると言え、さらに、これまで出土した多数の墨書土器や円面硯、石帯、墨書人面土器、平城宮式軒瓦の同笵品や、斎串、土馬など律令的祭祀に関連する資料と合わせて考えると、下田東遺跡の官衙的様相が一層強まったと言える。今後の調査でさらにその性格が明らかになることを期待したい。

〈葛下郡における稲作の状況〉

奈良時代にはすでに直播きではなく田植え農法が一般化していたと考えられている。田植えの時期については『続日本紀』延暦7年5月己酉条や『播磨国風土記』の記載から旧暦の5月頃であることが知られ、律令の注釈書として平安時代前期に編纂された『令義解』「学令」（大学・国学の教職員、学生令一般に関する規定）や『令集解』「假寧（けにょう）令」（官人の事由別休暇日数を規定した法令）には旧暦の5月と8月に「田假」（農繁期に与えられる官人等の休暇の規定）を給わることが記載されており、旧暦の5月が田植え、8月が稲苅り時期であることが分かる。ただし、それぞれの地域による時期は異なるので、

実情に合わせて休暇を与えると定める。

また、そこではさらに当遺跡の所在する葛下郡について、

「古記云 其郷土異宜 種収不等 通融便給 謂添下郡 平群郡等四月種 七月収 葛上 葛下 内（＝宇智）等郡五月六月種 八月九月収之類是」『令集解』巻40 假寧令

の記載がある。なお、「種」は殖を指す動詞であり、種蒔ではなく田植えのことであるという。そして、ここに見られる大和国内の諸郡における田植え及び収穫の時期差はある程度実態を反映していると考えられている（吉田1980）。また、時期は下るが藤原宮跡第36次調査の平安時代初期の井戸（SE3400）から出土した木簡「弘仁元年（810）十月廿日収納稲事」の記載から、これはあくまで収納日であるが収穫の時期とそう大きな隔たりはないと考え、大和国では収穫が旧暦の10月まで行われていたと考えられている（館野1991）。このように一国において収穫期間が長期にわたるのは、気候に左右されたということより、稲の品種や時期をずらすことによって災害時の被害の分散を図っていたと考えられている（館野1991）。また「假寧令」等で5月と8月を農繁期としているのは、京およびその周辺において5月と8月が一般的であったことを示し、それが品種でいえば中稲にあたると考えられている（平川2003）。

そこで、下田東遺跡で出土した木簡の記載に戻ると、a面で記載された田植えは「三月」であり、「和世種」「小須流女」は早稲と考えられる[3)]。また、b面で記載された「田苅」は「七月」であり、これも1ヶ月早いことから早稲の収穫時期を表している。このことから、『令集解』で記載されている葛下郡の様相よりも1ヶ月早くなり、葛下郡内である程度統一されていた田植え、収穫よりも1ヶ月早い品種を使用していたことが判明した。

〈子持勾玉〉

Ⅰ地区では表面に竹管紋を施した古墳時代の子持勾玉が出土した。勾玉は装身具として発展したが、子持勾玉は母が子供を産むという豊穣多産の姿を現したもので呪術的性格が強いとされ、祭祀遺物であると考えられている。これにより下田東遺跡で出土した勾玉は3例目になった。今回出土した子持勾玉は平安時代初期の井戸（SE5428）の掘形から出土したもので、残念ながら本来どのような場所で使用されたかは不明である。香芝市で子持勾玉は狐井城山古墳で採集されたものと合わせて2例目となる。奈良県内で50例ほど発見されている子持勾玉の中でも表面に竹管紋を施した例は全国的に少なく、奈良県では桜井市の芝遺跡とこの下田東遺跡の2例のみである（下大迫2006）。今後の調査によって、さらに下田東遺跡の性格が明らかになることを期待したい。

註

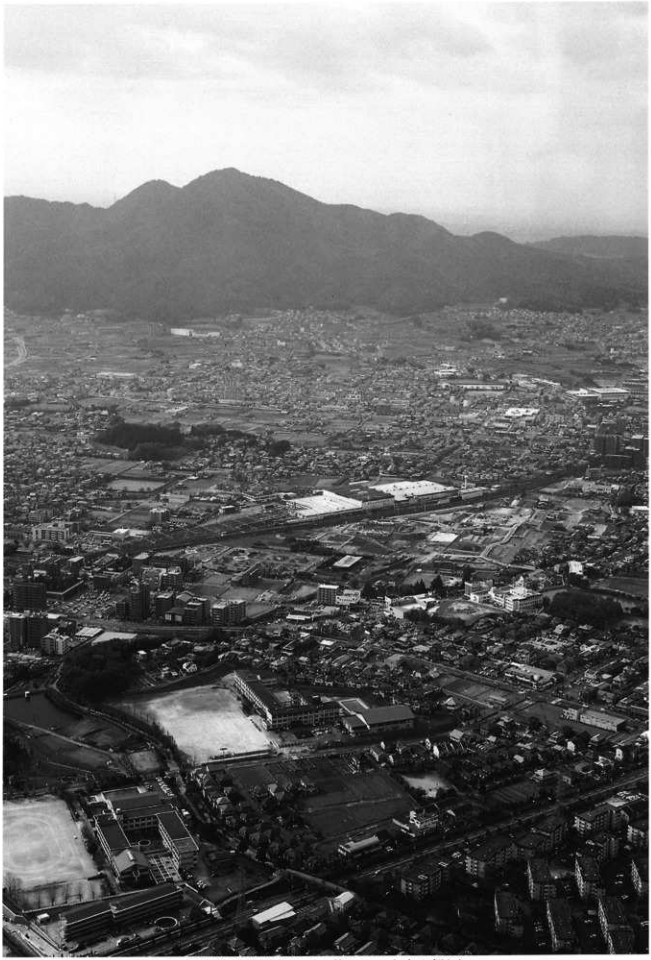
1）平成18年度の調査でも、北東に位置する66トレンチの調査では時期不明の不明鉄製品が見つかり、現在検討中である。

2）平川南氏よりご教授頂いた。

3）なお、木簡で記載されている「和世種」や「小須流女」は品種名であるが、これは平川南氏による「種子札（たねふだ）」木簡の研究に詳しい（平川1999・2003）。その検討によれば、現在までに山形県から福岡県まで「種子札」は検出されており、十数種の古代の稲の品種が明らかにされている。そして、「種子札」の多くは郡家もしくは周辺の遺跡から出土しており、地方においては郡司層が稲の品種を管理していたと考えられている。今回出土した木簡は「種子札」ではないが、下田東遺跡の公的な側面が補強されたと考えられる。さらに平川南氏からは石川県金沢市畝田ナベタ遺跡で2000年に出土した平安時代の荷札木簡の中に「須流女一石余」と記載されたものがあることをご教授頂いた。

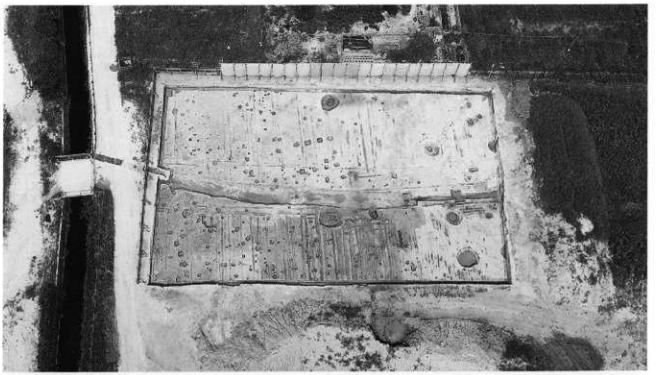
参考文献

・泉森皎　1993　「子持勾玉」　泉森皎・伊藤勇輔『遺物が語る大和の古墳時代』
・伊藤寿和　2005　「陸の生業－全体像と多様性の実態解明にむけて－」『列島の古代史　ひと・もの・こと』2　暮らしと生業
・尾上実・森嶋康雄・近江俊秀　1995　「6．瓦器椀」　中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』
・香芝市教育委員会　2005　「香芝市下田東遺跡出土木簡記者発表資料」2005年11月7日　香芝市教育委員会
・加藤優　1983　「1982年出土の木簡　奈良・藤原宮跡」　木簡学会編『木簡研究』第5号　木簡学会
・川畑誠　1996　「曲物容器の推移－北陸地方を中心として－」『月間 考古学ジャーナル』」404　6月号ニュー・サイエンス社、1996年
・小泉俊夫　1994　「歴史探索への提言：1．香芝市にかかわる古代の郷」『ふたかみ史遊』2　ふたかみ史遊会
・小泉俊夫　1994　「歴史探索への提言：2．原始時代の生活を語る遺跡」『同上』3　ふたかみ史遊会
・小泉俊夫　1994　「歴史探索への提言：香芝市内の条里復元」『同上』4　ふたかみ史遊会
・小泉俊夫　2000　「歴史探索への提言：香芝市にみる「荘園制」の展開」『同上』20　ふたかみ史遊会
・小泉俊夫　2002　「歴史探索への提言：下田東遺跡の発掘調査と地域史の課題」『同上』28　ふたかみ史遊会
・小泉俊夫　2003　「歴史探索への提言：下田東遺跡の出土瓦とその背後に秘められた諸課題」『同上』30　ふたかみ史遊会
・（財）桜井市文化財協会　2000　『大和の縄文時代－奈良盆地の狩人たちの足跡展－』平成12年度春季特別展解説書　（財）桜井市文化財協会
・（財）桜井市文化財協会　2000　『三輪山周辺の考古学』平成12年度秋季特別展解説書　桜井市立埋蔵文化財センター展示図録第20冊　（財）桜井市文化財協会
・下大迫幹洋　2006　「祈りの子持勾玉」香芝の文化財シリーズ展示解説（スポット展示2006年6月17日～7月17日）
・館野和己　1991　「〔4〕村落の歳時記」日本村落史講座編集委員会『日本村落史講座』第6巻　生活Ⅰ〔原始・古代・中世〕
・館野和己・鈴木景二・鷲森浩幸・大庭脩　1998　「第二部 日本の木簡」　大庭脩編『木簡－古代からのメッセージ』
・奈良国立文化財研究所　1993　「曲物」『木器集成図録』近畿古代編　奈良国立文化財研究所
・千田稔　1971　「古代大和国の部家と交通路」『藤田武雄先生退官記念人文地理論叢』
・波多野篤　2005　「奈良県香芝市下田東遺跡出土の土偶について」『ふたかみ』14－2004年（平成16年度）二上山博物館年報・紀要－　香芝市二上山博物館
・樋口知志　2005　「川と海の生業」『列島の古代史　ひと・もの・こと』2　暮らしと生業
・平川南　1999　「新発見の「種子札」と古代の稲作」『国史学』169
・平川南　2003　「第5章 木簡と農業」『古代地方木簡の研究』
・福田由里子　2006　「下田東遺跡 第5次日地区調査」『平成17年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』、奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、2006年
・真弓常忠　1977　「第3章　古代製鉄祭祀の神々」『神道史研究』第25巻第2・3号
・山下隆次　2006　「奈良・下田東遺跡」木簡学会編『木簡研究』第28号　木簡学会
・吉田晶　1980　「第3章 家父長制と個別経営　1 農繁期の雇傭労働力」『日本古代村落史序説』
・和田萃　2006　「下田東遺跡出土の木簡を考える」春季企画展　香芝発掘2005 記念講演資料



調査地遠景(北東から、後ろに二上山を望む)

図版2　H地区(1)



1. H地区　全景（南から）

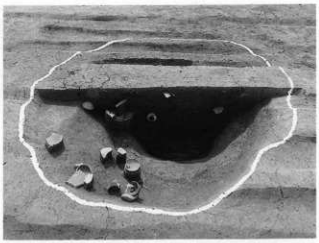
2. 掘立柱建物1（南から）

3. 掘立柱建物2（東から）

4. 上層素掘溝（南から）

5. 河道（東から）

1. SE3702　石出土状況（南から）



2. SE4057（東から）

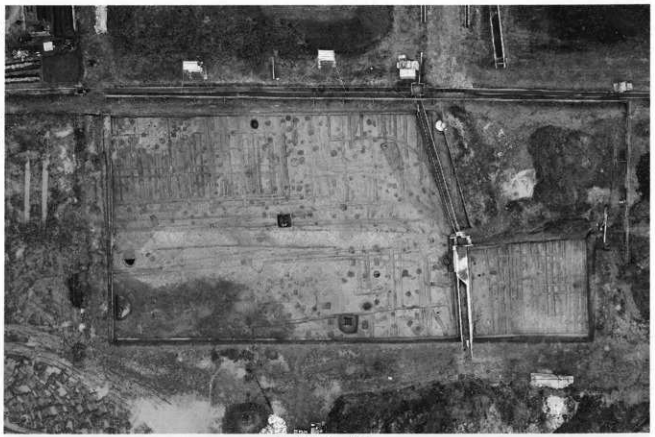
3. SE4033　土器出土状況（東から）

4. SE4033　下底曲げ物（西から）

5. 河道埋土内出土　大木及びSE4143（東から）

6. SE4143（西から）

図版4　I地区(1)



1. I地区　全景

2. 掘立柱建物（北から）

3. 掘立柱建物（北から）

4. 素掘溝出土土器

5. 素掘溝出土土器

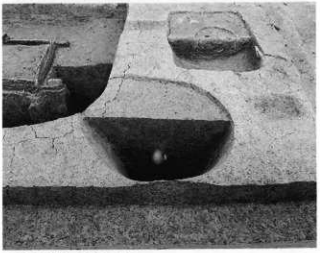
1. SE5428　掘形南半裁（南から）

2. SE5428　井戸枠下段（北西から）

3. SE5428　最下底（北から）

4. SE5426　下底曲げ物（南から）

5. SE5424（南から）

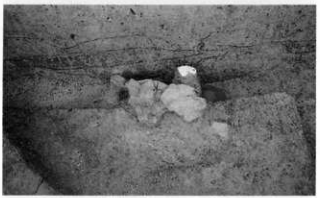


6. SE5431（南から）

図版6　L地区59トレンチ

1. L地区　59トレンチ全景（東から）

2. 上層Ⅰ　素掘溝（北西から）



3. SD5056　出土土器（北から）

4. 上層Ⅱ　素掘溝　SD5029　出土土器（南から）

5. 河道（北西から）

6. 河道及び南西隅の岸（北東から）

図版7　L地区60トレンチ

1. L地区　60トレンチ全景

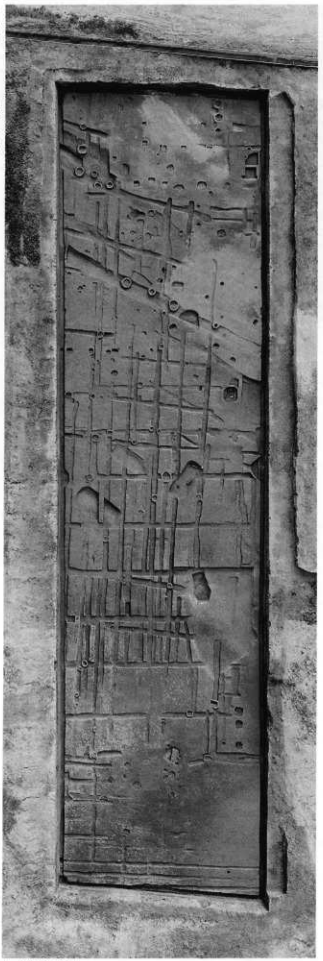
2. SD5066・SX5057（南西から）

3. SK5059　土器出土状況（南東から）

4. 西南隅　河道（西から）

5. 下層河道内　流木出土状況（西から）

図版8　J地区(1)



1. J地区全景

2. 上層素掘溝（北から）

3. 南半遺構（北から）

4. SO4261　出土土器（墨書）（西から）

1. SE4303（南から）

2. SE4303　南半裁（南から）

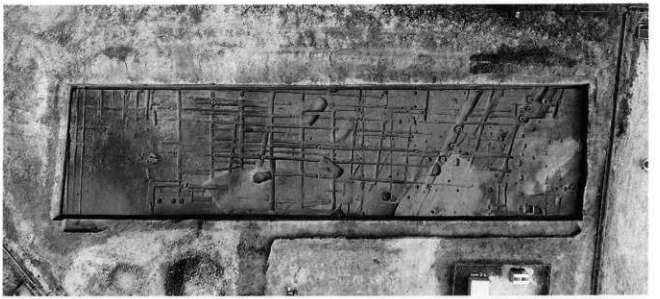
3. SE4305（南東から）

4. SE4305　南東半裁（南東から）

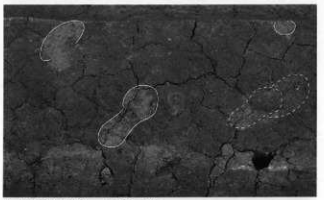
5. SK4531　木器出土状況（南から）

6. SK4530（西から）

図版10　J地区(3)



1. J地区　河道



2. 北東隅付近　人の足跡

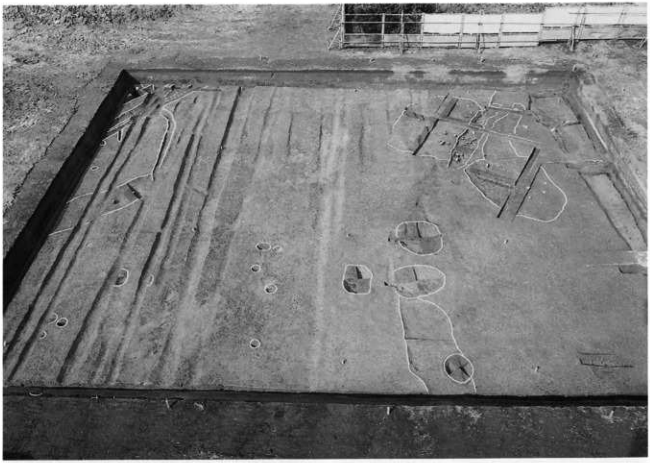
3. 南端河道　杭列検出（南西から）

4. 南西沼状遺構内　牛の蹄跡

5. 南端河道　杭列下底（西から）

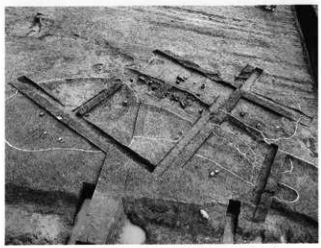
6. 南端河道内　馬の頭骨出土状況

7. 南端河道内　土器出土状況

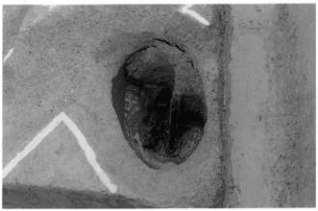


1. K地区　全景（南から）

2. 上層素掘溝



3. SX6332. 6333. 6334と東端流路（東から）



4. SE6306　木杭出土状況（北から）

5. SE6306　下底土器出土状況（北から）

図版12　K地区区(2)

1. 北西隅　河道

2. SD6305（東端流路）埋土

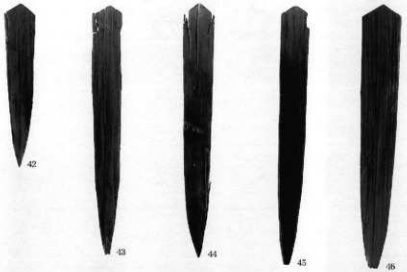
3. トレンチ東半遺構（西から）

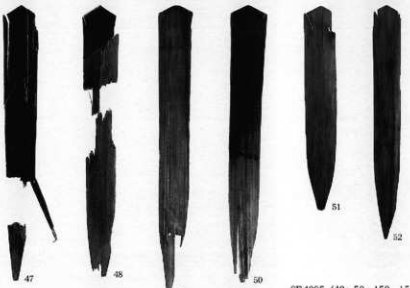
4.西壁断面（南東から）

5.トレンチ南西隅ピット（南東から）

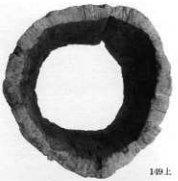
H地区　SE4095 出土　木簡（赤外線写真）

図版14　出土遺物(2)

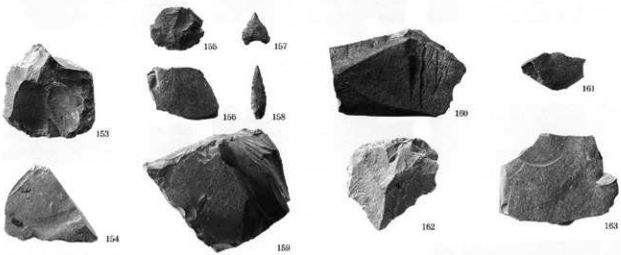




SE4096 (42~52, 150, 151)
SE4143 (66, 149)
SE4033 (152)



H地区出土　木製品



遺構面（153、154）　耕作土層（155～159）　旧河道（160～163）

H地区出土　石器

旧河道（88～93、164、165）　遺構面・耕作土層（166～169）

H地区出土　縄文土器

図版16　出土遺物(4)

170

171

172

173

174

175

176

177

SE5428 井戸枠
- 北板 4段目 170
- 北板 5段目 170
- 北板 5段目 170
- 北板 6段目 170
- 北板 6段目 170
- 北板 8段目 170
- 北板12段目 170
- 北板12段目 170

178 179 180 181 182 183 184 185 186 187

SE5428
- 178・179 11層、
- 180～187 12層

SE5426
- 1段目 188、2段目 189、
- 3段目 190、4段目内側 189、
- 4段目外側 192、5段目 193

188

189

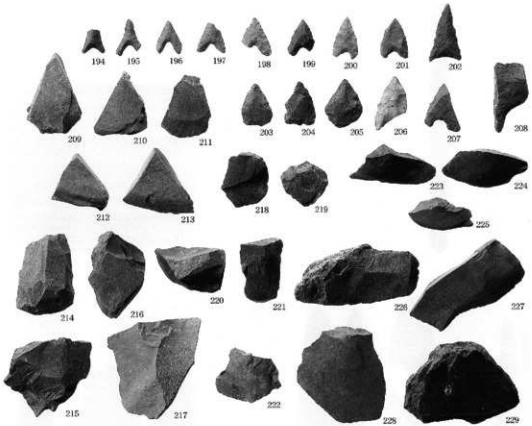
190

191

192

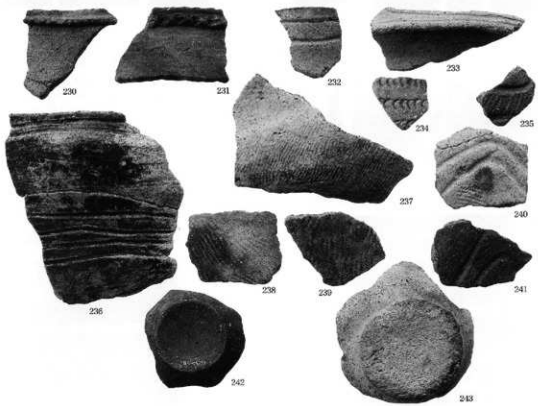
193

I地区出土　木製品



旧河道（194～229）

L地区 60トレンチ出土　石器



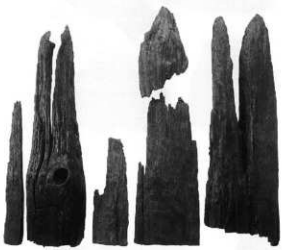
旧河道（230～243）

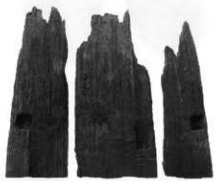
L地区 60トレンチ出土　縄文土器

SK4531 (244)
SE4303 (245)

244

245


246


247

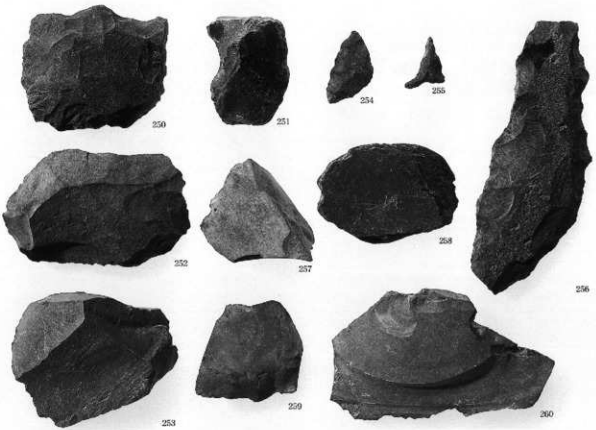
SE4303 井戸枠　南板 246
　　北板 247
SE4305 井戸枠　南板 248上
　　同 248下
　　西板 249

248上

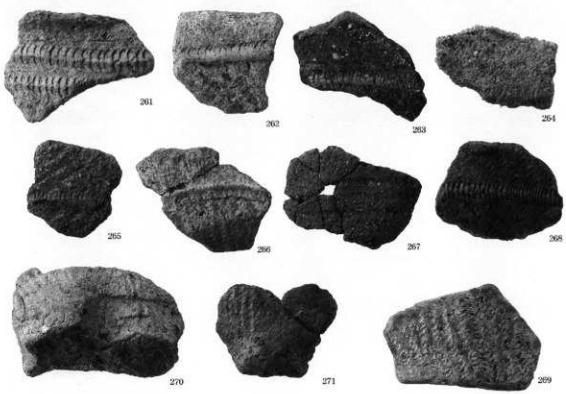
248下

249

J地区出土　木製品



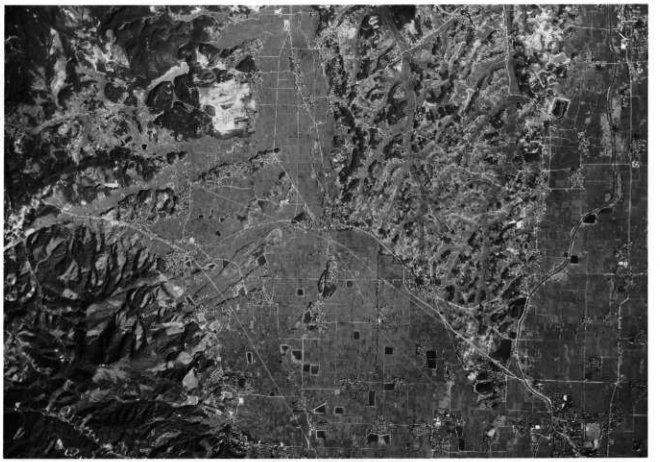
K地区出土　石器



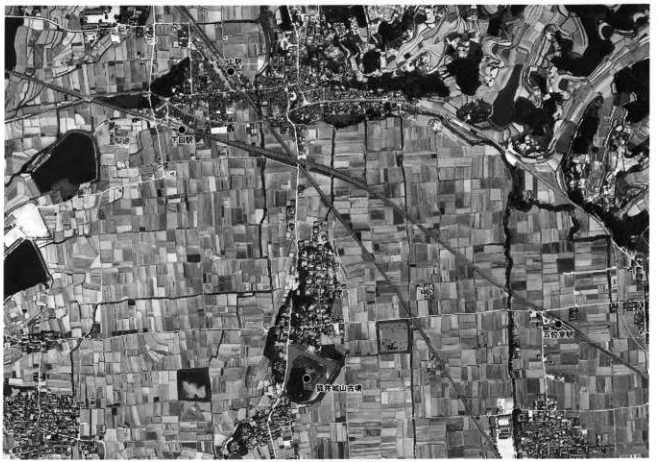
SR6335 (261～271)

K地区出土　縄文土器

図版20　航空写真



1．昭和36年撮影の航空写真



2．昭和22年撮影の航空写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	ごいどうえきまえきただいにとちくかくせいりじぎょうにともなうしもだひがしいせきはっくつちょうさがいほう
書　名	五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う下田東遺跡発掘調査概報
副書名	平成17年度
巻　次	
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	25
編著者名	藤田智子
編集機関	香芝市教育委員会 生涯学習課 二上山博物館
所在地	郵便番号639-0243　奈良県香芝市藤山1丁目17番17号　電話番号0745-77-1700
発行年月日	西暦2007（平成19）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
下田東遺跡 （五位堂区画第1次）	奈良県香芝市 下田東3丁目・狐井	29210	98	34度 32分 21秒	135度 42分 46秒	20010814 ～ 20020326	6,097㎡	大和都市計画・ 五位堂駅前北第二 土地区画整理事業

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項
下田東遺跡 （五位堂区画第5次）	集落跡・河道	縄文時代	河道	サヌカイト、縄文土器	古代の掘立柱建物群が展開。井戸からは多数の土器とともに平安時代の木簡が出土した。旧河道からは、縄文土器や古代の河川祭祀に伴う土器が出土した。
		古墳時代	帆立貝式古墳、溝、 土杭	土師器、須恵器、埴輪、 石製品、緑釉、 子持勾玉	
		飛鳥時代～ 奈良時代	柱穴、土杭、井戸、溝、 掘立柱建物、河道	土師器、須恵器、瓦、塼、 黒色土器、土製品、石製品	
		平安時代	柱穴、井戸、 掘立柱建物、河道	土師器、須恵器、瓦、 黒色土器、墨書土器、 木簡、畜串	
		中世	素掘小溝、井戸	土師器、瓦器、瓦質土器	

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　25
五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う
下田東遺跡発掘調査概報
－平成17年度－

2007(平成19)年３月31日

編　集　香芝市二上山博物館
〒639-0292　奈良県香芝市藤山1丁目17番17号
TEL. 0745-77-1700　FAX. 0745-77-1601
発　行　香芝市・香芝市教育委員会
〒639-0244　香芝市本町1397番地
TEL. 0745-76-2001
印　刷　堀内印刷株式会社
〒639-0067　奈良県大和高田市春日町1丁目９番10号
TEL. 0745-52-0557　FAX. 0745-23-2330